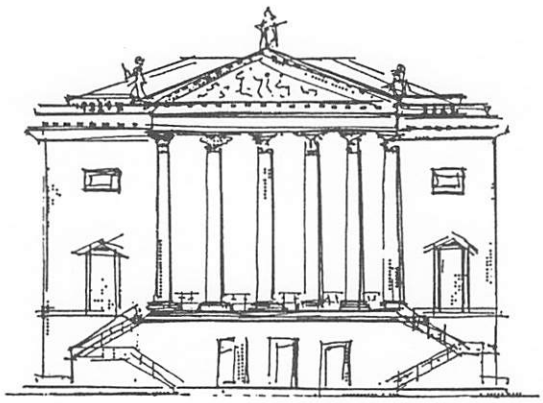
香川日独協会会報

Japanisch－Deutsch Gesellschaft

KAGAWA



STAATSOPER
UNTER DEN LINDEN
BERLIN

第9号

Mai 2001

目　　次

高松、ベルリン、ボン ---------- 中村　敏子　1

【特集：ボン訪問】
ドイツ訪問団旅行日程表 ---------- 5
知事のメッセージ ---------- 真鍋　武紀　7
ＢＯＮＮ旅行記 ---------- 地下真喜子　11
「ドイツにおける日本年」行事参加一行の一人としての旅行記---- 川原美知代　12
ドイツ訪問の余韻 ---------- 横山　晴美　14

【ホームステイ報告】
2000年9月高松でのホームステイ報告 --- サブリーナ・シュヴァイツァー　23
高松でのホームステイ ---------- ジャネット・プリンツラー　27
ホストファミリー報告 ---------- 明神　実枝　35
子ども達との交流を通して ---------- 関亦　頼子　42
５年ぶりの訪独記録 ---------- 藤田　晋　43
ドイツでの体験 ---------- 上村比登美　48
ホームステイの感想 ---------- 喜多由紀子　49

【会員のご活躍・お便り】
環境先進国　ドイツを訪問して ---------- 真鍋　賢二　53
青春の思い出　Ｓ.３８ ハンブルク時代のある一日 ---------- 加藤　元規　54
入会にあたって ---------- 松浦　洋三　56
ドイツでのホームステイ、インターシップ報告書
「ユース・イニシアティブ Expo 2000」におけるボンでの体験談-- 明神　実枝　57
ドイツの新聞で紹介された学生会員（明神実枝、金光紀子）---------- 69

フィーツェ氏からのご挨拶とビザの簡素化について ---------- 71
ボン独日協会：新年のご挨拶と役員名簿 ---------- 73
2000年度香川日独協会事業活動報告 ---------- 75

高松、ベルリン、ボン

中村 敏子

待望のサンポート高松がようやく形になりました。その威容を目前にしますと大きな期待がふくらんで参ります。

県民ホールあたりから西に向かって立つと、そびえる新しいホテル、玉藻城の雄大な石組みと松の緑は、歴史を刻んだ水城跡と、近代建築のすばらしいコンビネーションといえます。これらはうまく溶け合っており、実に美しいものです。

久方ぶりに来日したドイツの客人を案内しましたが、ここは特級の観光スポットになるでしょうと息をのみ、しばらくの間佇んでいました。その時私はまた別の光景を思い浮かべていました。先年、ベルリン・ポツダム広場の工事現場をバスツアーでまわったときのことです。クレーンが林立し、トラックが走り回る現場のすぐそばまで私たちの観光バスは進入していきました。轍のあとを追いかけるように、また別のバスがやってきます。少し離れたビルの屋上からは、広大な建築現場を鳥瞰できるようになっていました。観光客は、そこを離れようとしません。、新生・ベルリン建設中の迫力とエネルギーを新しい息吹として体感していたのでした。完成を待つ気持ちは大いに膨らむ、という彼らの宣言はなんとうまい表現だったであろうかと、今振り返ります。

昨年7月は、ボン独日協会の要請で「ドイツにおける日本年」行事に参加しました。草の根交流“さぬき踊り”としての参加でしたので、ボンの旧市庁舎前広場には、時ならぬさぬき民謡と和太鼓が鳴り響きました。案じられた天気も順よく晴れ舞台の踊り手の方たちと共に、大勢の市民がうかれ酔いしれました。広場は興奮の坩堝と化し、薄暗くなった夜 10 時、夕焼けの余韻を残して幕がおりました。ボンでの交流の成功は、翠扇会はじめ大勢の方々のご協力があってこそのものでございます。この行事が持て、それが協会にとっては何よりの記念すべき1頁となりましたことを、皆様にお伝えし、関係各位に重ねてお礼を申し上げたい次第でございます。私ども一行がボンに到着した日の夜、ボンの方々が歓迎会を催してくださいました。市民の殆どが旅に出るという夏の休暇の最中のことでした。日本大使館・国方公使をはじめ協会員多数が出席して下さったありがたい宴席でした。ボンの方たちへのお礼を句にたくし、締めくくりたいと思います。

故郷に似たる山脈ボンの夏　(ふるさとに にたるやまなみボンのなつ)

Die Berge hier und
in der Heimat so änlich!
der Sommer im Bonn.

特集：**ボン訪問**

2000年7月21～23日

香川日独協会ドイツ訪問団

訪問団メンバー

香川日独協会 20名

細川 清(名誉会長)　中村 敏子(会長)　金地喜世子　金光 紀子
川田 敦子　川原美知代　楠本 容子　後藤 裕子　地下眞喜子
中村賢二郎　長谷川 透　福井ひとみ　福池三千代　藤本 康夫
細川公子　三宅加代子　三宅弘　森 勉　山下由果　横山 晴美

翠扇会（民舞団） 16名

香西 正子　羽野ミエ子　山西 哲子　山本 晃子
安戸 洋子　伊賀登茂子　和泉文子　井上カズヱ
井上 潮美　河野 玲子　後藤 良子　小林 京子
中筋賀代子　古田 泉　真鍋 一美　宮池 俊子

香川日独協会ドイツ訪問団旅行日程表

（香川日独協会事務局：00.7.27現在）

月　日	曜	発着地・滞在地名	現地時刻	航空会社等	予定・ホテル等	食事
① 7／21	金				集合、7：20 全日空カウンター前	
		高松空港発	8:00	EL- 722		
		関西国際空港発	10:30	KL- 868	オランダ航空で アムステルダムへ	ポーター 機内
		アムステルダム着	15:10			
		アムステルダム発	16:10	KL-2657	オランダ航空で デュッセルドルフへ	
		デュッセルドルフ着	17:05	専用車	ボンへ	
					ボン協会との交流会の会場へ	
		バート・ゴーデスベルク着	19:30		ボン協会との交流会場 「シュタット・ハレ」（公会堂） ・香西先生、羽野先生踊りを披露 ・「Stadt Halle」 Koblenzerstr. 80 53177 Bonn-Bad Codesberg ☎ 0228-364035	夕食
		バート・ゴーデスベルク発	22:00頃	専用車	ボンのホテルへ（ボン泊）	
②-1 7／22	土	ボン	朝		ホテルで朝食	朝食
		ボン発 ケルン	9:30	専用車	ケルンへ ケルン市内視察 《世界遺産》大聖堂	
			昼		ケルン市内の レストランで昼食	昼食
		ボン着	14:00	（徒歩）	ホテルで休息	

月　日	曜	発着地・滞在地名	現地時刻	航空会社等	予定・ホテル等	食事
②-2 7／22	土	ボン （日本庁舎）	17:30	（徒歩）	ボン市長表敬訪問（全員） ・日ボン本庁舎 Alte Radhausstr. Marktplaz Bonn ・ボン市側応対者：ハウスティル助役 ・香川県知事のメッセージ	
			18:00	（徒歩）	幕の内弁当（ホテル?）	夕食
		（日ボン本庁舎演広場）	20:00	（徒歩）	「さぬき踊り」披露 ・19:00 地元女性コーラス ・20:00 さぬき踊り 踊り→タイコ→踊り→タイコ ・21:00頃終了 ・希望者は、懇親会へ	
			21:00過	（徒歩）	ホテルへ　（ボン泊）	果物等
③ 7／23	日	ボン	朝		ホテルで朝食	朝食
		ボン発	8:00	専用車	コブレンツへ	ポーター
		コブレンツ着発	11:00,12:30	観光船	ライン川遊覧	
		リューデスハイム	14:00	専用車	レストランで昼食	昼食
		発	16:00	（徒歩）	ワインの町を散策	
		ハイデルベルク着	17:42	専用車	ホテルへ ホテルでチェックイン 夕食：中華料理（市内レストランで） （ハイデルベルク泊）	夕食
④-1 7／24	月	ハイデルベルク	朝		ホテルで朝食	朝食
		ハイデルベルク発	8:30	専用車	ローテンブルクへ ・古城街道	
		ローテンブルク着	11:40	（徒歩）	ローテンブルクの街を散策	
			昼		レストランで昼食	昼食
		ローテンブルク発	14:15	専用車	ニュールンベルクへ	

月　日	曜	発着地・滞在地名	現地時刻	航空会社等	予定・ホテル等	食事
④-2 7／24	月	ニュールンベルク 着	15:50		カイザーブルク城、 デューラーの家 市庁舎広場　視察 ホテルでチェックイン 夕食：市内のレストラ ンで日本料理 （ニュールンベルク泊）	夕食
⑤ 7／25	火	ニュールンベルク ニュールンベルク 発 ミュンヘン　着	朝 8:00 11:40	専用車	ホテルで朝食 ミュンヘンへ ミュンヘン市内視察 ニュンフェンブルク 城、マリエン広場、 新市庁舎	朝食
			昼		市内のレストランで 昼食	昼食
		ミュンヘン　発 ザルツブルク　着	13:30 16:30	専用車 （徒歩）	ザルツブルクへ （国境を越え オーストリアへ） ザルツブルク旧市街を 散策（ガイド：住吉様、女性）	
			18:30 19:30		ホテルでチェックイン ホテルで夕食 （ザルツブルク泊）	夕食
⑥-1 7／26	水	ザルツブルク ザルツブルク　発 ウィーン　着	朝 8:00 12:30	専用車 （ガイド：亀井様	ホテルで朝食 ウィーンへ ・途中モンデ湖畔で 散策(8:25~9:15) シェーンブルン宮内で	朝食 昼食

月　日	曜	発着地・滞在地名	現地時刻	航空会社等	予定・ホテル等	食事
⑥-2 7／26	水	ウィーン	14:00 16:39 19:00	、女性。不道徳）	ウィーン市内視察 シェーンブルン宮殿 オペラ座入場 王宮(Hofburg) ホテルでチェックイン ホテルで ウィンナー・ シュニッツェルの 夕食 （ウィーン泊）	夕食
⑦ 7／27	木	ウィーン	朝 9:00	（ガイド：鈴木様 、女性） （川原氏：ハンガ リーへ）	ホテルで朝食 終日自由行動 ・オプショナルツアー ・ウィーンの森外 夕食：バイキング（ウィーン泊）	朝食 昼食?
⑧ 7／28	金	ウィーン ウィーン　発 空　港　発 フランクフルト着 フランクフルト発	朝 8:25 10:45 12:15 13:30	（ガイド：平屋様） 専用車 LH-3659 LH- 740	ホテルで朝食 空港（帰国）へ ルフトハンザ航空で フランクフルトへ 乗継（トランジット） ルフトハンザ航空で 関西国際空港へ	朝食 機内 泊
⑨ 7／29	土	関西国際空港　着 関西国際空港　発 ＪＲ　坂出駅　着 ＪＲ　高松駅　着	7:30 9:00 昼 13:30 14:00	LH- 740 専用車	バスで高松へ 弁当（車中） （途中：大阪市内渋滞状態、事故で渋滞。） 解散（ご苦労様）	機内

KAGAWA
PREFECTURAL GOVERNMENT

メッセージ

中村敏子香川日独協会会長を団長とするドイツ訪問団が貴地に赴く幸便に託しまして、貴台に御挨拶を申し上げられますことは、私にとりまして大きな喜びであります。

本県とドイツの間では、香川大学とヘッセン州ビーシバーデン大学との学術交流や企業活動を通じた経済交流のほか、香川日独協会を中心として民間レベルでの交流も盛んに行われております。県では、これまで、貴国から国際交流員として３名の青年を招致し、県が実施いたします国際交流事業の推進に御助力いただいたところであります。

この度の訪問団は、日本の文化・学術を総合的に紹介する「ドイツにおける日本年」を記念して貴地を訪れるものであり、滞在中、香川日独協会と姉妹関係にありますボン独日協会との親善交流や、貴市主催の「ゾンマー・イン・ボン」において伝統舞踊の公演などを行うことになっております。

香川日独協会は、文化や産業における日独両国間の友好関係を助長し、併せて両国民の親善を図ることを目的として１９９１年１０月に設立され、爾来、本県における日独友好の中心的団体として、ドイツ文化の紹介や、ホームステイの相互受入れ、訪問団の派遣などを通じて、県民のドイツに対する理解の促進や、両国の友好関係の進展に努めてこられました。この間、１９９４年にはボン日独協会と友好協会提携を行うなど、活発な活動を展開されておられます。現在では、会員数２２４名を擁する県内でも屈指の国際交流団体のひとつであります。

また、貴地において日本民舞を紹介いたします「翠扇会」は、当地香川において、伝統的な民踊の保存と継承に御尽力いただいている団体であり、今回、市民の皆様にご紹介する「さぬき踊り」は、私どもの地方において、古くから踊り継がれているものであります。

今回の訪問を通じて、ボン市民の皆様に、香川県について御理解いただき、両地域の交流が深まりますことは、誠に意義深く、これを機に、本県とボン市、さらには日本とドイツの友好の絆がますます深まりますよう念願してやまないところであります。

終わりに、「ゾンマー・イン・ボン」をはじめとする「ドイツにおける日本年」の各種行事の御成功と貴市のますますの御発展並びに貴台の御健勝、御活躍を心から祈念いたしまして、御挨拶といたします。

なお、貴地滞在中、当訪問団が所期の目的を達せられますよう御高配賜れば誠に幸いに存じます。

２０００年７月２２日

ドイツ連邦共和国ボン市長

ベーベル　ディックマン　殿

日本国香川県知事

真鍋武紀

KAGAWA

PREFECTURAL GOVERNMENT

22. Juli 2000

An die Oberbürgermeisterin der Stadt Bonn,

Frau Bärbel Dieckmann

Vom Gouverneur der Präfektur Kagawa,

Takeki Manabe

Sehr geehrte Frau Dieckmann,

Diesmal besucht eine Reisegruppe der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Kagawa unter der Leitung von Frau Toshiko Nakamura, die auch gleichzeitig die Vorsitzende der Gesellschaft ist, Bonn. Es ist mir eine große Freude, Ihnen bei dieser Gelegenheit meine herzlichsten Grüße zu übermitteln.

Neben dem akademischen Austausch zwischen der Universität Kagawa und der Fachhochschule Wiesbaden und wirtschaftlichen Beziehungen zwischen Unternehmen unserer Präfektur und deutschen, gibt es auch einen regen Austausch auf privater Ebene, in dessen Mittelpunkt die Japanisch-Deutsche Gesellschaft Kagawa steht. Auch waren im Rahmen des JET-Austauschprogramms bereits drei Deutsche im Bereich des internationalen Austauschs mit großem Erfolg in unserer Präfektur tätig.

Neben dem „Japan in Deutschland-Jahr", durch das in Deutschland eine breite Facette japanischer Kultur vermittelt werden soll, ist die Vertiefung der Freundschaft zwischen der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Kagawa und der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Bonn der Anlaß der diesjährigen Reise nach Deutschland. Auch werden Teilnehmer der Reisegruppe im Rahmen der Veranstaltung „Sommer in Bonn" einen Volkstanz unserer Region aufführen.

Die Japanisch-Deutsche Gesellschaft Kagawa wurde im Oktober 1991 mit dem Ziel gegründet, die privaten und kommerziellen Beziehungen zwischen Deutschland und Japan zu vertiefen. So konnte sie einen Beitrag zur Förderung des gegenseitigen Verstehens und der Freundschaft zwischen Menschen beider Länder durch gegenseitige Besuche von Delegationen und die Organisation von Homestays in Kagawa und in Deutschland leisten. Seit 1994 sind die Japanisch-Deutsche Gesellschaft Kagawa

und die Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn verschwistert und es findet ein reger Austausch statt. Mit 224 Mitgliedern ist die Japanisch-Deutsche Gesellschaft Kagawa in unserer Präfektur einer der Aktivsten Vereine, der sich der Vertiefung des internationalen Austausch verschrieben haben.

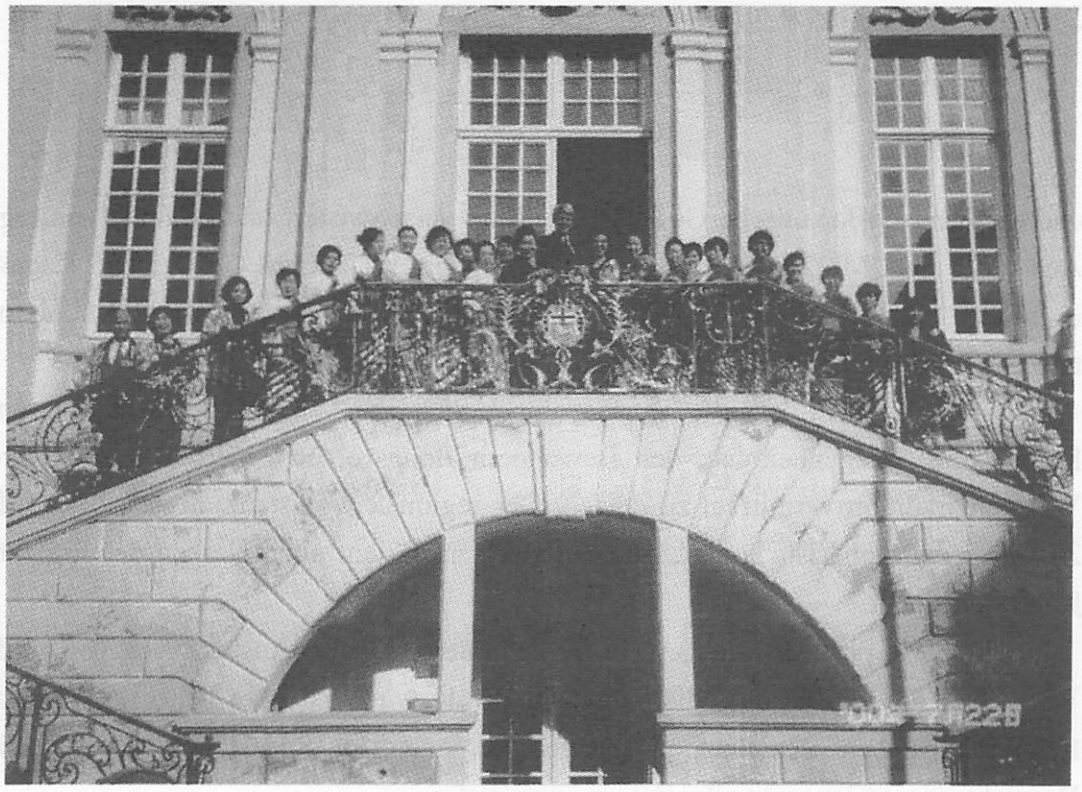
Wir freuen uns, dass die Tänzergruppe „Suisenkai" (übersetzt: Gruppe Grüner Fächer) die Gelegenheit hat, den Bewohnern Bonns einen Eindruck unserer alten Volkstanztradition vermitteln zu dürfen. Der regionale Volkstanz, dessen Pflege das Ziel dieser Gruppe ist, heißt „Sanuki odori", nach dem alten Namen der Präfektur Kagawa benannt.

Ich denke, privates Engagement für den internationalen Austausch ist von großer Wichtigkeit und hoffe, dass die Reise ein Erfolg wird und dazu beitragen kann die freundschaftlichen Beziehungen unserer Regionen im Speziellen und zwischen Deutschland und Japan im allgemeinen zu vertiefen.

Ich wünsche, dass das „Japan in Deutschland-Jahr" sowie der „Sommer in Bonn" große Erfolge werden und möchte meinen Brief mit den besten Wünschen für die Entwicklung und das Wohlergehen Bonns schließen. Den herzlichsten Dank auch an Sie und die Deutsch-Japanische Gesellschaft in Bonn, für Ihre Unterstützung beim Aufenthalt unserer Delegation in Bonn.

Mit freundlichen Grüßen,

Takeki Manabe



ＢＯＮＮ旅行記

地下真喜子

待ちに待っていた始めてのヨーロッパ旅行。それもあこがれのドイツ！

出発の日は晴天に恵まれ、日頃の行いの良い人がお仲間にいたのだ、と納得。ドイツに一歩踏み入れて、「ん何か違うぞ！」と感じた。とても落ち着ける。気持ちがゆったりする。なぜだろう？ 目に映る景色がとても自然。けばけばしさがない。どこかの国と大違いだ。

アムステルダム経由でフランクフルトについてバスでボン入りした。すぐに歓迎会、交歓会が催された。夢の中の出来事のようであった。同じテーブルの方が日本語を勉強してらして、日本語ＯＫで、とても親切であった。ドイツのこと、日本のことについて、歓談した。

翌日は世界遺産のケルンの大聖堂とケルン市内を見学した。何年もかけての修復、維持管理の大切さ、大変さと共に歴史の重みを感じた。ものを大切にするドイツ人の精神を強く感じた。

夕刻から始まったSommerfestival in Bonn (Japan in Deutschland 1999-2000) では、我が高松の翠扇会による踊りが披露された。BONN市庁舎前広場に特設舞台が設置され、広場もたくさんの人で賑わった。最後にはテンポの速い曲で一般の人を巻き込んでの楽しい踊りの輪となった。舞台から溢れ広場にも踊りだした。

ボン独日協会会員の方が参加されている「震太鼓」の皆さんの演技は日本人の私も感動しました。すばらしい和太鼓の演奏でした。ビデオに一部撮影していますので、ご覧になりたい方はいつでもお貸しします。

ボン大学の構内を散策したり、ライン川の川縁の公園を歩いたり、ベートーベンハウスを見学したり、ボンの町を楽しみました。首都であった重みと、落ち着きが感じられました。日本人はそれほどに感じていない宗教についてであるが、ドイツ人にとって教会とは大切な物、生活の一部であると感じた。

ボン。また行きたい街、美しい街、優しい街・・

帰国してから知ったことであるが、あの心地よさの影には人々の大変な努力があると言うことであった。努力するドイツ人、徹底するドイツ人、ベストを尽くすドイツ人・・多くのことを学んだ旅行でした。

「ドイツにおける日本年」行事参加一行の一人としての旅行記

川原　美知代

それは７月２１日のボン独日協会の祝賀会から始まった。市庁舎に付属する施設での食事会である。私は隣に座った御年９２才の令婦人との会話ご主人が万葉集の大事な部分を翻訳して勲章を受けたこと等を思い出すが、それよりもそのご高齢でお洒落をしてお出かけになるところは皆が感動したところである。また私と同じ年頃のドイツテレコムに勤務の方とも長らく話した。この方とは次の日の日本年行事の打ち上げの時にもお会いすることができ國方公子とともにまた冗談交じりに話したのであった。

ボンでの２日間はErika Becker-Blonigen さんに泊めていただいた。Erika さんは日本の戦後復興期にドイツ大使館に勤務するご主人と共に日本に数年居らして私が特産したおかきなどのお菓子を息子達が小さい時居たから喜ぶわと受け取ってくれた。今はお一人でお住まいだがおもてなしとかインテリヤ等たった２日間しかも朝早く夜遅く帰る日々でお名残惜しい滞在だったが、さすがといえる感じだった。玄関にはうちわ、夏を感じさせるいけばな。リビングには日本生活がおありのせいか弥勒菩薩があった。朝食は白マイセンにブルーのテーブルクロス。手作りの杏ジャム。寝室には小さなあんどんがありリラックスさせてくれた。私も１２年間ホームステイをコーディネートするボランティアの仕事についていたが素敵な方をお世話いただいた理事の方に感謝したい。

２２日には昼間ケルンの大聖堂に行って願いの叶うマリア様に願掛けをしたがまだその願いは叶えられていない。いつ叶うのだろう。外の広場に体を金の布でまとったパントマイムの人がいて大いに人の興味をそそるものだった。ソ連崩壊前にみたレーニン廟の護衛の人にも感動したが次にすごいなと思った。バッキンガム宮殿の護衛の人などとても短時間に思える。強靭な体でないと出来ないことだと思う。またその日結婚披露でオープンカーで石畳を走っているカップルが何組もいてラッキーな日だなと思った。

ボン市長表敬ではそれがビジネスでもあるがヨーロッパの素敵な人というのはオーラがきらきらしている。寄港地のアムステルダムでも思った。写真では判らないものだ。本当に見ないと。以前そう言う人に会ったのは‘９７年にクイーンエリザベスⅡ世号で大西洋横断したときに出会ったフィレンツェとフランスにお住まいの超美人の双子姉妹と、トスカーナに森をもつスイスの貴族の人だった。やはりなんと言ってもグレイシャスなのである。

ウィーンのシェーンブルン宮殿では手持ちのロングドレスを持って行った。長い大理石の階段がありパリのオペラ座にも似ていると思ったが、トレイルが栄えてドレスというのはこういう所のためにあるのだなと思った。これにオケイジョンがあると本当の意味で良いのだが。

ザルツブルグでは例のフィレンツェのマダムのお友達がいらっしゃるとのことで手紙を

書いておいた。でもその日は音楽のソワレがあったらしくたった一泊の日程ではお会いする事が出来なかった。でもホテルにカードとチョコレートを届けてくれていた。なかなか粋である。ビジネスもなさっているとのことでお会いしたらさぞかし素敵な方だったんだろうなと思う。今回の旅行は日程がきつかった。今度からは自分でプランするようにしよう。

ザルツブルグの大宮でモーツアルトの装束を付けたコンサートを同室した後藤さんと行った。後藤さんが着物を着ていたので合間にコーヒーで休んでいる時に芸者さんですかとか聞かれた。しかしながら広い空間である。

旅も最後ウィーンで皆さんはホイリゲとかに行って楽しかったそうだが私は単身ハンガリーのブタペストに向かった。行きのバスでスウェーデンで医学を勉強している若い鈴木夫婦と知り合いになって、一緒に街を歩いたりお茶をしたりした。２０才の時初めてイギリスの店から手に入れたのがヘレンドの花鳥写しの手書きのコーヒーカップだったが思いもかけずヘレンドの本店に行くことが出来た。Erika さんが持っているのと同じ型のクッキーディッシュをゲットした。鑑定書も付いており思い出の品になった。壁面型押し装飾の教会のある見晴らしの良い丘で記念写真を撮った。

この旅はこれで終わるのかと思いきやもう一つ思い出となったことがある帰りの飛行機でビジネスクラスの方に行くことがあってパイロットの方がコックピットに招き入れてくれたのである。席に座っていると空を飛んでいるといる実感はそれ程でもないと思うがそこは一面の空が広がっていたのである。それと何百というスイッチ。２人のパイロットの操縦を目のあたりにした。

ということで日程的にはハードな旅だったが実に色々な事を体験した旅だった。出来れば次回はＱＥⅡに乗った時には２０日間全部ででかけたようにゆっくりとした旅がしたいと思う。

ボン独日協会交流会で

Erika Becker-Blonigen さん

ドイツ訪問の余韻

横山　晴美

先日ドイツの知人から３度目のエアメールが届いた。2000年７月、交流会に参加したとき同席した大学生と、文通をしている。カタコトの単語と日本語とで、何とか意志の疎通が出来た様に思う。つたない文でその時の写真を送ったのが始まりで、折にふれ日本古来の図柄（舞妓さん、ひな祭り）のカードで送るようにしている。封を開けると、日本語で書かれた手紙だ。感激！　日本語を学び、中村会長さん宅にも来て、お二人で顔を見せて下さったりもした。ドイツは寒く雪が降っているが、カーニバルが近づき、楽しみにしている等と書かれ、若い娘らしく、シールを貼ったりした実に可愛く、今の若者を感じさせられた。

訪独の際、大変お世話になったメンヒ会長さんからも、お忙しいなか素敵なカードとお便りを頂いた。わずか一日半の滞在だったけれど、私にとってまた一つ世界が広がった。そして、もう少し若かったら・・・と、どうにもならない事を思ってみたりした。元気で精一杯、後の人生を楽しみたいと思う。もう一度、時間に拘束されることなく、ゆっくりとドイツを楽しみたい。

又一つ、目標ができた。いつになる事やら。しかし、実現に向って突っ走りたいと思う。最後に特筆すべきは、ワインとビールが、実に実においしかったこと。ライン川のほとりで、ゆっくりと心ゆくまでグラスを傾けたいと思う。　Ｐｒｏｓｉｔ！

Frohe Festtage und
Gesundheit, Glück und viel Erfolg
im Neuen Jahr 2001

良いお年をお迎え下さい！

Marianne und Dieter Mönch

まもなく終わろうとしている年は私たちにとって出来事の多い年でした。得に「ドイツ日本年1999/2000」のため数々の催し物があって、多くの訪問客がボンに来ました。度々お客様を我が家に迎えする栄誉にも与りました。

それに加えてマリアンネには二つのハイライトがありました。ひとつは彼女は今夏に長年間に亘って独日親善活動の故にドイツ連邦の功労十字章を受けたということ。もうひとつは、秋にボン独日協会の総会で会長に選ばれたことです。

ディターは相変わらずいろいろな勉強とスポーツの趣味に専念します。

もちろん、我々二人とも寄る年輩を感じますが、健康は比較的良いです。

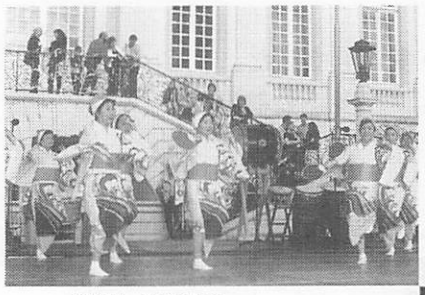
子供は二人とも相変わらず「シングル」です。息子のインゴは秋にアーヘンのレーザー研究所を辞めて、今ケルンの会社で働いております。娘のハイケはボン大学で卒業論文の準備をしています。

Dear Mrs. Yokoyama,
thank you very much for your letter and foto. I often remembered the summer festival and your visit in Bonn. I write so late, please excuse me. I was realy very busy. おげんきで.
Best regards
Marianne Mönch

1999ー2000ドイツにおける日本年

讃岐踊りと震太鼓（約30名の舞踊グループ）
„Sanuki-Odori“ (Tanz) und „Shin-Daiko“ (Jap. Trommeln)

DJG Bonn
Bonsai-Ausstellung


讃岐踊り　Sanuki-Tanz

盆栽　Bonsai

(4)その他の草の根交流

上記以外にも各地の民間・市民団体の協力で、様々な草の根レベルでの交流事業が実施された。ベルリンでは「世界のお巡りさんコンサート」に日本からも参加し、シュトゥットガルトでは、シュミット日本国名誉総領事を中心に江川・和鼓太鼓演奏者や日本語学習者のための合宿「日本語村祭」等の行事が実施された。ハンブルク、デュッセルドルフ、ワイマールでの花火大会、ベルリン、ハンブルク、デュッセルドルフでの"ネオ・ジャパネスク99「四古都」"上演（キールでは展示会を開催）、ハンブルクでのジュディー・オング版画展のほか、茶道、華道、書道の紹介や展示、囲碁の本格的な紹介事業も各地で実施された。

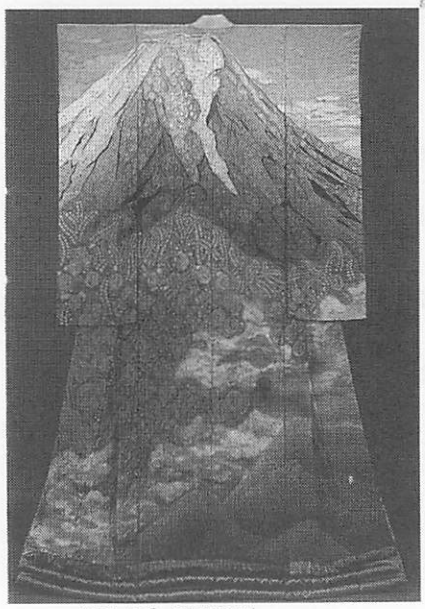
(4) Sonstiger Austausch auf Bürgerebene

Neben den oben genannten Aktivitäten fanden in Zusammenarbeit privater Organisationen und Bürgervereinigungen verschiedenste Austauschveranstaltungen auf Bürgerebene statt. In Berlin nahmen auch Vertreter aus Japan an der „Parade der Polizeiorchester aus aller Welt" teil, und in Stuttgart wurde u.a. auf Initiative des Japanischen Honorargeneralkonsuls Herrn Schmidt eine Festveranstaltung „Dorf der japanischen Sprache" veranstaltet, wo Trommelkünstler aus Japan und Japanischlernende gemeinsam übernachten. In Hamburg, Düsseldorf und Weimar wurden Japanische Feuerwerke abgebrannt; in Berlin, Hamburg und Düsseldorf fand die Aufführung „Yokoto" des Ensembles Neo Japanesque '99 statt (in Kiel als Ausstellung). Neben einer Ausstellung mit Holzschnitten der Künstlerin Judy Ongg in Hamburg wurden an zahlreichen Orten auch Vorführungen und Ausstellungen über Teezeremonie, Blumenarrangement und Kalligraphie sowie das Go-Spiel veranstaltet.

料理研究家・辰巳芳子による日本食指導
Vorstellung der japanischen Eßkultur von Yoshiko Tatsumi

きもの・加賀友禅　Kimono-Kagayûzen

DJG Bonn
⇐ Jeanette Prinzler


久保田一竹「一竹辻が花染め」
Ausstellung von Kimonos der Itchiku-Tsujigahana-Färbetechnik von Itchiku Kubota

「面と伝統」展・実演　Men (Japanische Maske)

DJG Bonn
Origami mit Tomoko Fuse ⇒

折り紙　Origami

GA 24.07.00

Die Zuhörer spüren die Trommeln mit dem Körper

BONNER SOMMER Japanische Kultur auf dem Marktplatz

Von **Carsten Schlüter**
und **Heinz Engels** *(Fotos)*

Es war kein Gewitter, das am Samstag über den Marktplatz grollte, sondern es waren gewaltige Schläge auf die Fass-Trommeln der Taiko-Musiker. Der Auftritt der sechsköpfigen Gruppe „Shin Daiko" aus Düsseldorf war der Höhepunkt des Japan-Festivals, das die Deutsch-Japanische Gesellschaft am Wochenende veranstaltete.

Mit traditionellen Klängen aus dem Reich der aufgehenden Sonne, erzeugt auf zum Teil selbstgemachten Trommeln, rissen die Musiker die rund 600 Besucher mit. „Taiko-Musik bedeutet, die Trommeln mit dem ganzen Körper zu spüren", erläutert Pia Meid von der Deutsch-Japanischen Gesellschaft. Das merkte auch das Publikum, auf das sich die bebenden Rhythmen übertrugen.

Dazwischen präsentierte die japanische Tanzgruppe „Suisenkai" traditionelle Odori-Tänze in Original-Kostümen. Sie werden in Japan zu Festen wie Erntedank oder Sanuki Odori, einer Art Himmelfahrtsfest, aufgeführt und beschreiben tägliche Arbeiten. Eine Besucherin war so mitgerissen, dass sie spontan auf die Bühne sprang, um ihre Begeisterung per Mikrofon den anderen Zuschauern mitzuteilen. Unter höflichem Applaus wurde sie schließlich von einem Sicherheitsmann von der Bühne geleitet. Auch der Frauenchor Shiojiri aus Nagano kam gut an. Die 24 Mitglieder der 1973 als „Mutterchor" gegründeten Gruppe trugen deutsche und japanische Volksweisen vor. In seiner Heimat, so Chorleiterin Tomiyasu Yamada, tritt das früher nur aus Müttern bestehende Ensemble meist bei Stadtfesten auf. Am Freitag begeisterte der Chor das Publikum in der Remigiuskirche.

Unter den Zuschauern auf dem Marktplatz waren auch viele Japaner (siehe Foto). Viele von ihnen trugen, genau wie die Darsteller auf der Bühne, Kimonos. Für sie bot das Festival zahlreiche Motive zum Fotografieren und Filmen.

Die starken Trommelschläge *der japanischen Taiko-Musiker dröhnten am Samstag nur so über den Bonner Marktplatz.*

Sommerfest des Fernen Ostens

Bonn. Wellenförmig, fast ekstatisch wirkten die Bewegungen der Trommelgruppe „Shin Daiko". Höchste Konzentration und vor allem ausdauernde Armmuskulatur verlangt das traditionelle japanische Trommelspiel den Musikern ab. Die Gruppe selbst, die am Samstagabend als „Bonner Sommer"-Attraktion auf dem Marktplatz auftrat, bezeichnet das als Synthese von „Rhythm, Power und Spirit". Der Frauenchor „Shiojiri" aus der japanischen Provinz Nagano, der zum ersten Mal in Bonn gastierte, und das Tanzensemble „Suisenkai" komplettierten mit ihren faszinierenden Darbietungen in traditionellen Sommerkimonos das Programm des „kleinen japanischen Sommerfests". Anlässlich des Japan-Jahres 2000/2001 hatte die Deutsch-Japanische Gesellschaft gemeinsam mit der Stadt die fernöstlichen Eindrücke ermöglicht. him/Foto: Magunia

Tanz und Trommeln aus Japan

Kultur und Tanz aus dem Land der aufgehenden Sonne beim Bonner Sommer

Odori-Tänze *zeigten die in Original-Kostüme gekleideten Tänzerinnen der Gruppe „Suisenkai" vor der Kulisse des Alten Rathauses.*

Bonn (GS). – Das war eindrucksvolle japanische Kunst, was da auf der Bonner Sommerbühne vor dem Alten Rathaus geboten wurde: das japanische Sommerfestival, das ein Stück fernöstliche Kultur mit Gesang und Tanz nach Bonn brachte.

Odori und Taiko – Tanz und Trommeln – wurden als feste Bestandteile traditioneller japanischer Sommerfeste dargeboten.

Das Programm, das anlässlich des Japan-Jahres 2000 gestaltet worden war, eröffnete der Frauchenchor Shiojiri aus Nagano mit internationalen Volksweisen in der Remigiuskirche.

Auf dem Marktplatz zog die Tanzgruppe „Suisenkai" viele tausend Zuschauer in ihren Bann, als sie mit ihren Kulttänzen japanische Lebensfreude veranschaulichte.

Die deutsche Gruppe „Shin Daiko" wurde mit ihren Fass-Trommeln in das bewunderswerte und zugleich hinreißende musikalische Geschehen mit einbezogen. Foto: Schell

Sayonara, Bonn! Grüße aus Japan

exp Bonn – Japanische Tradition auf dem bönnschen Marktplatz – kontrastreicher können Kulturen kaum aufeinander prallen.

Doch den Bonnern gefiel der stimmungsvolle Auftritt der asiatischen Gäste. Der Frauenchor Shiojiri, die Tanzgruppe Suisenkai und die Trommelgruppe Shin Daiko führten die Bonner ins Land der aufgehenden Sonne. Die fremdartigen Kostüme, der ungewohnte Rhythmus – da blieben viele Rheinländer erstmal stehen, um zu lauschen und zuzugucken.

„Das hat ja schon einen ganz eigenen Reiz", fand Andrea Willmut (44). „Ich interessiere mich schon immer für asiatische Kulturen, aber für eine große Reise war mein Geldbeutel immer zu schmal. Dass ich diese Show direkt vor der Haustür erlebe, ist einfach großartig."

Das japanische Sommerfestival. Ein faszinierender Einblick in eine uralte Kultur – leider viel zu kurz...

Ungewohnter Anblick vor dem bönnschen Rathaus: Die japanische Tanzgruppe Suisenkai faszinierte die Bonner mit ihrem Charme am Wochenende. Ein spannender Einblick in eine fremde Kultur.

Fotos: Alexander Schwaiger

ホームステイ報告

In Kagawa:

Sabrina Schweitzer
Jeannete Prinzler
Clarissa Ottawa

In Bonn:

藤田　　晋
上村 比登美
喜多 由紀子

ホームステイ・プログラムの記録（２０００年４月～２００１年３月）

（　）内の氏名は受け入れ会員名

ボンから香川へ

Anton（Toni）Wiegand　２０００年６月１３日～１８日（中村賢二郎・敏子）
Sabrina Schweitzer　２０００年９月３日～１１日（羽白洋・由美子／川原美代子）
Jeannete Prinzler　２０００年９月２０日～２７日（向山等／中村敏子）
Clarissa Ottawa　２００１年３月２日～９日（明神実枝）

香川からボンへ

福井ひとみ　２０００年７月２１日～２２日
楠本容子　２０００年７月２１日～２２日
川原美知代　２０００年７月２１日～２２日
藤田　晋　２０００年８月２２日～２７日（Roeder）
上村比登美　２０００年９月２０日～２７日（Burgass）
喜多由紀子　２０００年９月２０日～２７日（Burgass）

⊠ホームステイ担当より：

ボンでのホームステイについては随時をお受けしていますので、ご希望の方は髙木までご連絡下さい。

連絡先：☎087-847-4793(Fax 兼用)または 087-832-1923(Fax 兼用)✉takagi@ec.kagawa-u.ac.jp

ザブリーナ・シュヴァイツァー

2000年9月 高松でのホームステイ報告

私の日本でのホームステイは全体でちょうど四週間でした。2000年9月3日高松に到着し、9月11日大阪に向けて旅を続け、9月27日にやっとドイツに戻ってきました。それはたくさんの親切な人々と知り合い、とても多くのことを見た、日本でのすばらしいひとときでした。

最初の三日間は羽白さん宅に泊まりました。高松駅に到着したとき羽白さんがすでに私を迎えに来ていました。家に到着すると奥様がとても親切に迎えられました。もう夜遅かったので夕食後少しだけ歓談し、旅行で疲れていた私はまもなく寝に行きました。翌日私たちは栗林公園を見学しましたが、そこはとても大きくてとても綺麗だったので、とても印象づけられました。私たちは茶室でも休憩をとり、風景を楽しみました。私たちは庭師の方に出会いましたが、彼はとても親切で、公園についてたくさんの面白いことを話したり、案内して下さいました。その後私たちは瀬戸大橋の全貌が見渡せる展望台に行きました。それに引き続き、第八十二番札所に行きましたが、私はそこがとても気に入りました。もちろん私は四国の八十八カ所について教えていただきました。次の日私は羽白先生と香川医科大学に行き、ドイツ語の授業で学生たちのドイツについての質問に答えました。日本の大学を内部から見ることはとても興味深いものでした。午後は再び三人で八十八番へ行きましたが、そこは本当に見応えがありました。このように日本の最初の数日間でもうたくさんのことを体験し、楽しみまし。というのは羽白さんご夫妻は本当によく私のことを世話してくださったからです。

9月6日私は川原美代子さんとその家族の元へ移りました。彼女らと一緒に金比羅さんへ(遠足はきつかったが、それだけの価値がありました)、丸亀の団扇博物館や近代美術館、善通寺や酒博物館へのすてきな遠足をしました。私は美代子さんの大学を見学し、そこでたくさんの親切な友人たちに会い、もちろん日本の学生食堂食事も試してみました。その他にも美代子さんのお母さんが先生をしている小学校へも行きました。それはとても私の気に入りました。子供たちはとても可愛らしくドイツと日本の小学校の違いはとても面白かったです。私は全教室を見ました。校長先生がとても親切に学校中を案内して下さいました。もちろん私たちはうどん屋さんへも行きました。そこで私は職人さんの手元を見ることができるのに熱狂しました。それ以外にも美代子さんのおばさんが親切に私に着物を着させてくれたので、琴を弾いたり、書道をしたりしたが、とても楽しかったです。

私に唯一あったトラブルは歯のことでした。土曜日に詰め物がとれてしまい、日曜日にはとても痛んだので、お母さんが武部先生に電話をかけました。先生はとても親切に診療所を私のために開けてくれて、私の歯を無料で治療してくださいました。この迅速で献身的な手助けに私はとても感謝しています。川原家での日々は大変なご厚意でとても楽しく、たくさんの経験をもたらしてくれました。とてもうれしい気持ちで思い出しています。

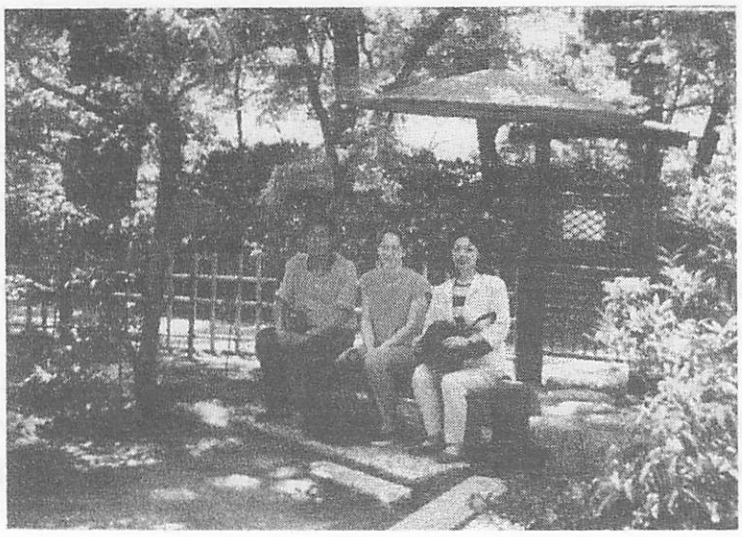
翌月曜日には高松での私の楽しい日々終わり、大阪へ行きましたが、そこでもすてきな日々を過ごしました。高松でのホームステイは本当にすてきで、たくさんのすばらしい印象を受けました。私にはこの町とホストファミリーはいつまでも最高の思い出になるでしょう。

Sabrina Schweitzer
Heerstr. 25 d
51143 Köln
Deutschland

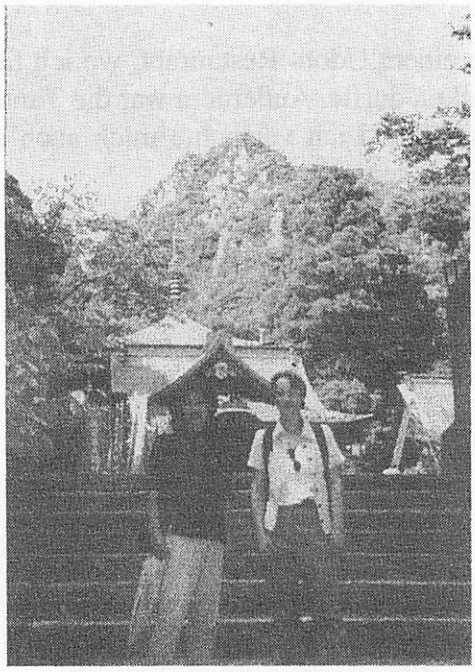
Bericht über den Homestay- Aufenthalt in Takamatsu im September 2000

Mein Homestay-Aufenthalt in Japan dauerte insgesamt knappe vier Wochen. Am 03.09.2000 kam ich in Takamatsu an, bin am 11.09. Nach Osaka weitergereist und am 27.09. bin ich schließlich wieder zurück nach Deutschland geflogen. Es war eine wunderbare Zeit in Japan, in der ich viele nette Menschen kennengelernt und sehr viel gesehen habe!

Die ersten drei Tage durfte ich bei Yumiko und Hiroshi HAJIRO wohnen. Als ich am Bahnhof in Takamatsu ankam, war Hr. Hajiro bereits dort, um mich abzuholen. In seinem Haus angekommen, begrüßte mich auch seine Frau sehr freundlich und da es schon spät war, haben wir uns nach dem Abendbrot noch kurz unterhalten und dann bin ich, müde von der Reise, schon bald schlafen gegangen. Am nächsten Tag haben wir uns den Ritsurin- Park angesehen, der mich sehr beeindruckt hat, weil er so groß und vor allem so schön ist. Wir haben auch in einem Teehaus Pause gemacht und die Aussicht genossen. Dort haben wir den Meister- Gärtner des Parks getroffen und dieser war so freundlich, uns viele interessante Dinge über den Park zu erzählen und uns herumzuführen.

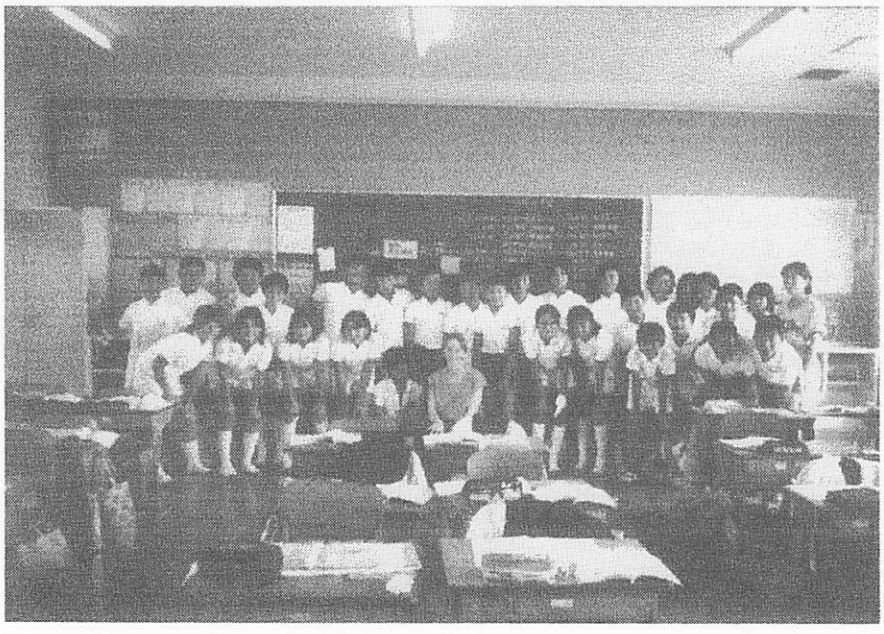


Danach sind wir zu einer Aussichtsplattform gefahren, von der aus man die Setoohashi in ihrer ganzen Länge sehen kann. Anschließend haben wir noch den 82. Tempel besichtigt, der mir sehr gefallen hat und natürlich bin ich auch über die 88 Tempel auf Shikoku aufgeklärt worden. Tags darauf durfte ich mit Hajiro-sensei in die Kagawa Medical University gehen und in seinem Deutschunterricht den Studenten ihre Fragen über Deutschland beantworten. Es war sehr interessant für mich, eine japanische Universität von innen zu sehen. Am Nachmittag sind wir dann wieder zu dritt zu dem 88.Tempel gefahren, der wirklich sehenswert ist.



So hatte ich schon in den ersten Tagen in Japan viel erlebt und viel Spaß gehabt, denn das Ehepaar Hajiro hat sich wirklich wunderbar um mich gekümmert!

Am 06.09. bin ich zu Miyoko KAWAHARA und ihrer Familie gezogen. Mit ihnen habe ich tolle Ausflüge zum Konpira-san (der Aufstieg war hart, aber er hat sich gelohnt!), nach Marugame, ins Fächermuseum, ins moderne Kunstmuseum, zum Zenjitsu- Tempel und ins Sake- Museum gemacht. Ich habe auch Miyokos Universität gesehen und habe dort viele nette Freunde von ihr getroffen, und natürlich habe ich auch das japanische Mensaessen probiert. Außerdem durfte ich mit in die Grundschule gehen, wo Miyokos Mutter Lehrerin ist. Das hat mir sehr gefallen, die Kinder waren so süß und die Unterschiede zwischen einer deutschen und japanischen Grundschule sehr interessant. Ich durfte alle Räume sehen, der Rektor war so nett, mich in der ganzen Schule herumzuführen.



Natürlich waren wir auch in einem Udon- Restaurant, wo ich fasziniert davon war, daß man dem Koch auf die Finger gucken durfte. Außerdem war die Tante Miyokos so freundlich, daß ich ihren Kimono tragen durfte und ich versuchte mich auch am Koto-Spielen und an der Kalligraphie, was sehr viel Spaß gemacht hat.

Das einzige Problem, das ich hatte, war mein Zahn. Denn am Samstag war die Füllung herausgebrochen und am Sonntag tat es so weh, daß Frau Kawahara Dr. Takebe anrief und dieser war so außerordentlich freundlich, seine Praxis für mich zu öffnen und meinen Zahn kostenlos zu heilen. Für diese schnelle und selbstlose Hilfe bin ich sehr dankbar!
Die Tage bei der Familie Kawahara waren durch ihre große Gastfreundschaft sehr lustig und erlebnisreich, ich denke gerne daran zurück!
Am Montag darauf war meine schöne Zeit in Takamatsu auch schon vorbei und ich bin nach Osaka gefahren, wo ich ebenfalls wunderbare Tage verbrachte. Der Homestay-Aufenthalt in Takamatsu war wirklich toll, ich habe viele wunderbare Eindrücke gehabt; ich werde die Stadt und meine Gastfamilien immer in bester Erinnerung behalten!

高松でのホームステイ

１．私は二年前から日本語を専攻し、文化や国、人々にとても興味があったので、私は必ず日本へ行こうと思っていました。それで一ヶ月の滞在を計画しました。

そうして８月２８日東京へ行きました。そこから甲府へ行きましたが、甲府で私は精神障害者のためのワークキャンプで二週間働きました。そこでは日本の社会システムを正しく見ることができました。

このキャンプで二週間過ごした後私は一週間日本を旅行して回りました。最初に計画した旅行は甲府から、松本、名古屋、京都、広島を経由して岡山に行くことでした。

２．９月２０日の約束した時間に高松に到着すると向山さんご夫妻が駅に私を迎えにいらしていました。そこから私たちは長尾にある家まで（車で約４０分）行きました。そこで私は畳とベッドのある個室に入りました。

私はいつでも好きなときに洗濯したり、シャワーや入浴をしたり、冷蔵庫を使うことができました。

最初の晩日本語しかできない向山さんがその辺りで何を見たいかを私に聞きました。旅行案内書を用意して私はいくつかの名所を挙げました。それで英語を話す姪御さんと一緒に見て回ることになりました。

３．９月２１日向山さんの姪のキョウコさんと私は四国村と「屋島寺」に行きました。彼女は私にとても面白い話を聞かせてくれたので、私は日本人の古い生活様式に魅了されました。

屋島寺から高松の、そして遙か遠くに瀬戸大橋の眺めがとても綺麗でした。

４．９月２２日私はキョウコさんと栗林公園に行き、魚に餌をやったり、盆栽に驚いたり、静かな茶室で「お抹茶」を飲んだりしました。

その後私たちは高松の大きな商店街に行き、北海道の美味しいものを試したり、日本の工芸品を鑑賞したり、おみやげを買ったりしました。

５．９月２３日は向山さんご夫妻と私は琴平の金比羅さんに行きました。そこでは１３６０段の階段を上まで登りました。

典型的なうどん屋さんで昼の休憩をとった後五重の塔がある善通寺（四国８８カ所の７５番札所）へ行きました。その後は満濃公園に行き、「コスモス」の花を見ました。自然と調和したとても美しい公園でした。

６．９月２４日は一年間ヴィースバーデンでドイツ語を勉強した日本人のあいさんと過ごしました。彼女は私と瀬戸大橋を渡り、与島まで行き、彼女のふるさと丸亀の小さな公園で彼女の家族に昼食をご馳走していただきましたが、次から次へと料理が出てきました。彼女は団扇博物館にも案内してくれました。その後私たちは丸亀城に行って、お

城の中まで急な階段を上がりました。

夕方は高松へ行き、中村さんのお宅へ夕食のご招待を受けました。向山さんと中村さんは日本の家庭を一つだけ見ることがないように最後の三日間中村さんのお宅に行かないかと私に言ってたのです。

７．中村さん宅では典型的な和食（たとえば、温泉卵、みそ汁、豆腐）を味わいましたが、ドイツパンも買っていただきました。

中村さんのお宅では畳の上の布団に寝ることができました。中村さんを通じてやはりヴィースバーデンで一年間ドイツ語を勉強した、もう一人の学生と知り合いになりました。その貴子さんと香川大学を通じて電子メールを送ることができました。

８．９月６日は中村さんと私は小学校に行きました。そこで私は日本の教育システムについて理解することができました。午後は貴子さんや山口裕史さん（高松の大学生）と船で女木島へ行き、鬼の洞窟（半時間山歩きした後で）を見ました。夜は香川日独協会の集まりに行きましたが、そこではお茶とお菓子をつまみながら、計画中の行事について議論がありました。

９．私の出発は９月２７日でした。私は高松ですでに岡山から東京までの新幹線の切符を買っていました。向山さんがわざわざお別れに来てくれて、中村さんが一緒に岡山で、次に乗り換える列車まで送ってきて下さいました。

東京までの列車の旅は四時間でした。東京でもう一晩飯田橋のユースホステルに泊まり、９月２８日にドイツへ飛び立ちました。

１０．最後に言いたいことは日本がとても気に入ったということです。私のホームステイのためにお世話して下さった方々はみんなとても親切で、いつでも手助けをしてくれて、骨を折って下さいました。向山さんとそのご家族、中村さんと親切な学生たちが私の四国でのすばらしい日々を可能にしてくれました。

私は高松とその周辺でとてもすてきな七日間を過ごし、多くを見て、全く新しい印象を持ちました。

とても楽しかったし、私もいつか自分が誰かをホームステイ客として迎えて、お返しすることができたらと思います。

Homestay in 高松

1. Da ich seit zwei Jahren Japanisch studiere und mich auch sehr für die Kultur, Land und Leute interessiere, wollte ich unbedingt nach Japan reisen. So plante ich einen ein-monatigen Aufenthalt.

So flog ich am 28.09. nach Tokyo. Von dort aus reiste ich nach Kofu, wo ich zwei Wochen lang in einem Workcamp für geistig Behinderte arbeitete. Dort hatte ich einen genauen Einblick in das japanische Sozialsystem.

Nach zwei Wochen in diesem Camp, reiste ich eine Woche durch Japan. Meine selbst organisierte Tour führte durch Kofu (甲府) über Matsumoto (松本), Nagoya (名古屋), Kyoto (京都), Hiroshima (広島) nach Okayama (岡山).

2. Als ich zum abgemachten Zeitpunkt, am 20.09., in Takamatsu angekommen war, haben mich Herr Sakiyama und seine Frau (meine Homestay-Gastfamilie) vom Bahnhof abgeholt. Von da aus sind wir zu seinem Haus in Nagao (ca. 40 min per Auto von Takamatsu entfernt) gefahren. Dort hatte ich mein eigenes Zimmer, mit Tatami-Matte und Bett.
Ich konnte Wäsche waschen, duschen oder baden und mich am Kühlschrank bedienen, wann immer ich wollte.
Am ersten Abend fragte mich Herr Sakiyama, der nur Japanisch sprechen konnte, was ich denn gerne von der Umgebung sehen wollte. Ausgerüstet mit einem Reiseführer schlug ich einige Sehenswürdigkeiten vor. So kam es, daß ich mit seiner Nichte, die Englisch sprach, herumgefahren bin.

3. Am 21.09. haben Herr Sakiyama's Nichte, Kyoko, und ich das Shikoku-mura ((四国村) und den „Yashima-ji" besichtigt. Sie hat mir sehr interessante Geschichten erzählt und ich war von der alten Lebensweise der Japaner fasziniert.
Vom „Yashima-ji" aus hatte man einen wunderschönen Blick auf Takamatsu und, weit entfernt, die „Seto-o-hashi" (Brücke).

4. Am 22.09. war ich mit Kyoko im Ritsurin-kouen (栗林公園) und habe dort Fische gefüttert, Bonsais bestaunt und in einem ruhigen Teehaus „o'matcha" getrunken.
Danach waren wir in der großen Einkaufspassage von Takamatsu und haben Leckereien aus Hokkaido probiert, japanisches Kunsthandwerk betrachtet und Souvenirs gekauft.

5. Am 23.09. sind Herr Sakiyama, seine Frau und ich nach „Kotohira" zum „Konpira-san" Schrein gefahren. Dort sind wir die 1360 Stufen bis zum Gipfel hinaufgestiegen.
Nach einer Mittagspause in einem der typischen udon-„Restaurants" sind wir zum „Zentsu-ji" (Nr. 75 der 88 Tempel der Pilgertour) mit seiner 5-stöckigen Pagode gefahren. Danach waren wir noch im „Mannou-kouen", wo wir die schönen „コスモス"-Blumen gesehen haben. Ein wunderschöner Garten, angelegt mit der Natur im Einklang.

6. Den 24.09. habe ich mit Ai, einer Japanerin, die 1 Jahr in Wiesbaden Deutsch gelernt hatte, verbracht. Sie ist mit mir über die Seto-o-hashi bis Yojima gefahren, hat mich mit ihrer Familie zu einem ganz abwechslungsreichen Mittagessen in einem kleinen Park ihrer Heimatstadt Marugame eingeladen und mir das Fächerherstellungsmuseum gezeigt. Danach sind wir zur Marugame-jo gegangen und haben die steilen Treppen im Inneren der Burg erklommen.

Am Abend sind wir nach Takamatsu gefahren, wo wir einer Einladung zum Abendessen in Frau Nakamura's Haus nachgekommen sind. Herr Sakiyama und Frau Nakamura haben mich gefragt, ob ich für die letzten 3 Tage nicht zu Frau Nakamura ziehen wollte, damit ich nicht nur ein japanisches Familienleben kennenlernte.

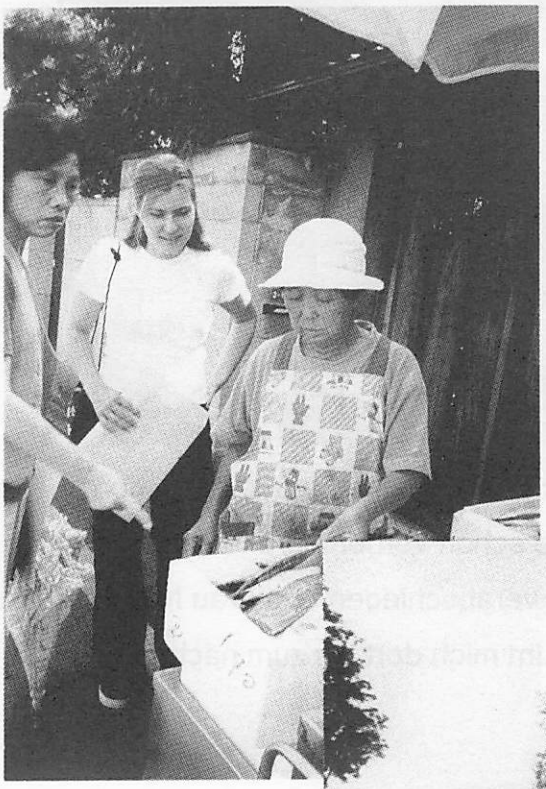
7. Bei Frau Nakamura habe ich typisch japanische Gerichte probiert (z.B. tamago-onsen, miso-suppu, Tofu), doch hat sie mir auch „deutsches" Brot gekauft.
Bei ihr konnte ich auf einem Futon auf der Tatami-Matte schlafen.
Durch sie habe ich eine weitere Studentin kennengelernt, die auch in Wiesbaden 1 1/2 Jahre Deutsch studiert hat. Mit Takako konnte ich über die Kagawa Universität eMails verschicken.

8. Am 26.09. waren Frau Nakamura und ich eine Grundschule besuchen. Dort konnte ich mir ein Bild über das japanische Bildungssystem machen. Mittags bin ich mit Takako und Hirofumi Yamaguchi (ein weiterer Student aus Takamatsu) mit der Fähre nach Megijima (女島) gefahren und habe dort die Höhlen der „Dämonen" (nach einem halbstündigen Bergmarsch) gesehen. Abends waren wir bei einer Versammlung der Dokunichi kaigyou (独日協会) in Takamatsu, bei der, neben Tee und Süßem, über ein geplantes Fest debattiert wurde.

9. Meine Abreise fand am 27.09. statt. Ich hatte meine Fahrkarte für den Shinkansen von Okayama nach Tokyo schon vorher in Takamatsu gekauft. Herr Sakiyama kam extra um mich zu verabschieden und Frau Nakamura fuhr mit mir von Takamatsu bis Okayama um mich dort bis zum nächsten Zug zu begleiten.

Die Fahrt mit dem Zug nach Tokyo dauerte 4 Stunden.
In Tokyo habe ich noch eine Nacht in der Jugendherberge von Iidabashi verbracht, bevor ich am 28.09. nach Deutschland zurückgeflogen bin.

10. Abschließend möchte ich noch sagen, daß mir Japan sehr gut gefallen hat. Die Menschen, die sich um meinen Homestay vor Ort gekümmert haben, waren alle sehr nett, hilfsbereit und immer bemüht. Herr Sakiyama, seine Familie sowie Frau Nakamura und die netten Studenten haben mir eine ganz tolle Zeit auf Shikoku ermöglicht.
Ich habe sehr schöne sieben Tage in Takamatsu und Umgebung verbracht, viel gesehen und ganz neue Eindrücke gewonnen.
Es hat mir sehr viel Spaß gemacht und ich hoffe eines Tages, das wieder zurückgeben zu können, indem ich selber jemanden als Homestay-Gast aufnehme.



ホストファミリー報告

日独協会学生会員　明神実枝
2001年3月10日
Email:mieallesgute@hotmail.com

2001年3月2～9日の間、我が家にクラリッサ・オッタワ(Clarissa Ottawa)さんを迎えました。クラリッサはボン大学で日本語と英語の翻訳を勉強しており、今回は日本語を勉強し、日本文化を学びたいということからホームステイを希望したそうです。高松に1週間滞在した後は、関東の方でも3週間ホームステイし、数日間旅行して4月2日にドイツへ帰国する予定です。

クラリッサは、ヨーロッパ外への旅行が初めてということもあって最初は緊張していましたが、日を重ねるごとにお互いに打ち解けることができ、とても楽しくお腹をかかえて笑ってしまうような思い出や経験を得ることができました。

私の家族は、私以外は仕事をしていているので、おもてなしもそれほど特別なことは出来ませんでした。6畳の部屋と布団を用意し、後は普段通りでした。例えば、朝食は、母の仕事が休みだった日に1回だけ日本的なごはんとみそ汁を作ってくれましたが、それ以外は普段通りのパンと紅茶でした。夕食も家族全員が揃ったり揃わなかったりでした。また、夕食の支度の際には、これも経験とクラリッサに手伝ってもらったりもしました。

クラリッサも私も、この1週間を楽しく過ごせたのは、何よりも日独協会会員の皆さんが香川県の名所を案内して下さったり、会って話をして下さったりしたおかげでした。特に、私の家族は車に乗らないし、私自身、香川県について知らないことがまだたくさんありますから、「どこをどう案内しようか？」という不安がありましたが、思いがけなく多くの日独協会の皆さんに助けられ、クラリッサにとっても楽しい1週間になったと思います。

我が家でのホームステイ、日独協会会員の皆さんとの交流はこんな様子でした。

＜ホームステイ日記＞

3月2日(金)高松に到着

大いに戸惑わせた初日

クラリッサとは神戸・三ノ宮で待ち合わせし、なんとジャンボフェリーで高松に向かいました。約4時間の船旅を終えて私の家に到着し、しかしお互いにとても緊張していました。クラリッサにとってすべてが初めてなので、スリッパを履くこと、畳の部屋にはスリッパを脱いで入ること、布団は押入れから出して敷くこと等から、新しい体験がスタートしました。

そして、おしぼりと和菓子、緑茶でおもてなししました。これも大変、初めておしぼりで手を拭かされ、小さな棒で和菓子を切って食べさせられたクラリッサの心境はきっと戸惑いの一言でしかなかったのでは、と思います。夕食にはにぎり寿し。ドイツでも食べたことがあったそうですが、見たことのない種類のさしみもあり、とても驚いていたようです。

3月3日(土)ひなまつり体験

四国村とうどん

この日は天候にもめぐまれ、四国村を散歩するには絶好の機会でした。私の家族は車に乗らないので、クラリッサと私は自転車で四国村に行きました。ちょうどひな祭りの日で、四国村の至るところにひな人形が飾ってありました。クラリッサは、最初はいまいちピンとこなかったようでしたが、次第に興味を持ち、それぞれのお人形に見入っていました。

また、お父さんが古いアンティークに興味があるらしく、日本家屋内の壺や木製の道具などの写真をたくさん撮っていました。この日は甘酒とひなあられが振舞われており、私たちもトライしました。

(写真①:3月3日　四国村で甘酒とひなあられで休憩。右がクラリッサ。)

ひな寿し作り

四国村から帰って、ひな寿し作りに挑戦しました。ばら寿しをおにぎりにし、それに薄焼き卵の着物を着せ、ようじに刺した人参とうずら卵をその上に差して作ります。仕上げに、おだいりさまにきゅうり、おひなさまにかまぼこを持たせ、みかんと桜もちのお供えもしました。

クラリッサは、とても初めてとは思えないほどおにぎりを上手ににぎり、ひな寿しづくりをマスターしてしまいました。このひな寿しがとても気に入り、「ドイツに帰っても作らなきゃ。でもドイツにはパサパサしたお米しかないから、日本のお米を持って帰る」と言い出したほどです。

3月4日(日)久保さんに案内してもらった1日

この日は、日独協会会員の久保昌代さんとそのお友達のめぐみさん、まきさんがクラリッサを栗林公園、屋島などへ案内してくれました。夕方帰ってきて、久保さんやそのお友達との一日が楽しかった様子を話してくれました。栗林公園の見学とお茶会の時にテレビに映ったかもしれないというので、一緒にテレ

ビに向かったところ、3 度も大きく映っていました。出かける前に「お抹茶は苦いよ」と脅していたのですが、「おいしかったよ」と満足な表情でした。

我が家での夕食に、カレーライスを食べましたが、これはとても好評でした。

3 月 5 日(月)大学とその周辺へ

中村さんと県庁、付属小学校訪問

午前中に香川日独協会会長の中村さんをお尋ねし、まず県庁 21 階の展望台に連れて行ってもらいました。空が晴れ渡っていたので非常に眺めが良く、写真を何枚も撮りました。そして、戸惑いながらも県庁のメンザで昼食をとりました。

午後は、中村さんにご案内頂き、県庁の隣にある付属小学校を見学させてもらう機会が与えられました。給食の時間、掃除の時間、制服や上履きなど、ドイツにはない日本独自のものを見せてもらったり、元気な子供たちと触れ合ったりすることができ、楽しいひと時を過ごせました。学校の設備も全体的に充実していてうらやましい、と言っていました。

デーゲン先生、高木先生訪問

その後、デーゲン先生のお宅、高木先生の研究室を訪ねました。

デーゲン先生のお宅を訪ねると、デーゲン先生が香川大学でドイツ語を教えていることに非常に関心を示し、いろいろと質問をしていました。そして、自分もいつかドイツ語の先生として日本で暮らしたい、と言っていました。高木先生にお会いして、クラリッサは先生がドイツやボンのことに詳しいことに驚いていました。私は高木先生にドイツの魅力を吹き込まれてドイツに行ったと言うと、納得していました。

日本の居酒屋、カラオケへ

その夜は、日独協会学生会員の山口君、関亦さんと一緒に日本の居酒屋へ行きました。

この時に始めて知ったのは、クラリッサはビールは飲まない、ソーセージは食べない、ということでした。なので、カルピスチュウハイを勧めると「これはおいしい。ドイツに持って帰らなきゃ」と言っていました。「ドイツ人らしくないドイツ人、というよりも日本人らしいんじゃない？」と冗談を交えながら、日本語とドイツ語で楽しく歓談できたひと時でした。

山口君とクラリッサ、私の 3 人で、帰りにカラオケにも行きました。最近はドイツでもカラオケバーのようなものはあるけれど、個室を借りて歌う形式のカラオケはないそうで、初めは恥ずかしがっていましたが、歌い始めるとマイクを放しませんでした。残念ながら、クラリッサは英語、私たちは日本語の歌を歌うので、お互いに知っているものは少なかったのですが、ビートルズなどは一緒に歌いました。

3 月 6 日(火)琴平観光と関亦さん宅での 1 日ホームステイ

金毘羅さんと金丸座

この日は、関亦さん、クラリッサと私の 3 人で金毘羅さんに登り、金丸座を見学しました。金毘羅さんの本宮までのぼりましたが、古い木造建築に関心を寄せていました。また、クラリッサは自分の干支を知っており、そのお守りを買っていました。金丸座では、ひとつひとつの考えられた舞台の仕掛けに感心していました。また、入り口の狭さに驚いていました。

うどんづくり

昼食は、自分達でうどんを打って食べようと、琴平参道の中にある中野うどん学校に行きました。クラリッサは香川に来て毎日のようにうどんを食べていますが、うどんを気に入っていたので、ドイツに帰ってもうどんを作りたいと意気込んできました。

日本語の説明が十分には理解できなかったと言ってはいましたが、うどんの作り方の説明書と麺棒、うどん学校終了の賞状を大事に持って帰りました。

（写真②:3 月 6 日　中野うどん学校にて。左からクラリッサ、関亦さん、うどん学校のおばちゃん）

関亦さん宅に 1 日ホームステイ

この日は関亦さん宅に 1 日ホームステイしました。関亦さん宅のお子さんのめいちゃん、まおくんとかるたなどで遊んで楽しく過ごしたようです。

3 月 7 日（水）小豆島観光

小豆島観光

この日は、クラリッサの 24 の瞳の映画村に行きたいという希望から、小豆島観光に出かけることにしました。メンバーは日独協会学生会員の川田さん、関亦さん、クラリッサと私の 4 人、関亦さんに車で運転してもらって、24 の瞳映画村と分教場、ふるさと村のそうめん館、お猿の国を訪れました。

24の瞳　草壁港に着いて、まず向かったのが24の瞳の映画村と分教場でした。海岸沿いの道路を走り、海と地図を見ながら「あそこが岬だ！」と言いつつ、分教場を通り越して島の岬の行き止まりまで行ってしまうという元気いっぱいのスタートを切りました。見学しながらストーリーを簡単に説明すると、クラリッサはそれをとても気に入ったようでした。そして、お土産やさんで24の瞳の文庫本を買って帰りました。

（写真③:3 月 7 日　24 の瞳の分教場にて。左からクラリッサ、関亦さん、川田さん。）

そうめん　その後ふるさと村のそうめん館に行って、そうめんのできるまでを見学し、実際に食べました。そうめんを時間をかけて伸ばしながら作る場面には感心していました。しかし、冷やしそうめんを食べた時は次第に寒くなり、振るえながら食べるはめになり、その後ホットココアを飲んで温まったという珍道中もありました。小豆島と言えばそうめんだと思って連れて行ったのですが、「真夏にもう一度行こうよ」と約束をしてそこを去りました。

お猿の国　その後、お猿の国にも行きました。クラリッサは動物が好きで、たくさんのニホンザルを見て珍しがり、その可愛らしいしぐさを見ていました。そして、えさもやりました。

（写真④:3 月 7 日　お猿の国にて。左からクラリッサ、川田さん、関亦さん。）

焼きそば

夕食は関亦さんのお宅で一緒に焼きそばを作って食べました。焼きそばも気に入って、「ドイツでも中華料理屋に行くと焼きそばがあるけど、これはおいしい」と言って、日本の焼きそばソースも買って帰ると言っていました。このころからスーツケースの心配もし始めました。食後は、その前の日と同じように、めいちゃんやまおくんと絵本を読んだり、かるたをしたりして少し遊びました。

3月8日(木)ショッピング

高松市商店街へ

かなり忙しいスケジュールだったので、この日は午前中ゆっくりして、午後から高松市商店街へショッピングに出かけました。日独協会会員の久保さんと長澤さんが一緒に来てくれました。クラリッサがドイツでうわさに聞いた100円ショップに行ったり、民芸品店をのぞいたりしました。

途中で「お茶しよう」ということになり、喫茶店でお茶とケーキを食べながらおしゃべりを楽しんでいました。すると、ケーキ屋のオーナーが「あなたはどちらから？私は東京にいた頃は外国の方とも良くお会いしていたんです。」と話かけて下さったことがきっかけで話に花が咲いて咲いて、結局ケーキをもう2種類もごちそうしてもらってしまいました。

(写真⑤:3月8日。喫茶店にて。座っているのが左から久保さん、長澤さん。立っているのはクラリッサ、私。)

巻きずし作り

最後の夕食はクラリッサの好きなものをご馳走してあげようと考えていました。私の母は「クラリッサはもうそろそろ日本食が飽きただろうから、カレーライスやスパゲッティを作ってあげようか」と言っていたのですが、クラリッサ本人の希望は、まき寿司でした。

そういうことならとクラリッサにも手伝ってもらうことにしました。合わせ酢を作るところから始まって、まき寿

司をまいて切るのもしてもらいました。驚いたことに、お手本として一番に巻き寿しをまいてみせた私よりも、クラリッサのほうが上手にまいていました。

全く初めての挑戦とは言っていましたが、随分練習してきたのではないかと思うほど手つきが良く、こちらが驚きました。食事の後で、合わせ酢の分量やその他作り方をメモしていました。

（写真⑥:3月8日　巻き寿しに挑戦している真剣なクラリッサ。）

3月9日（金）　高松を出発

楽しかった一週間もあっという間に過ぎて、心配していた荷物も何とかまとまり、クラリッサは8時58分のマリンライナーで出発しました。

＜ホームステイの受け入れを終えた感想＞

気軽にホームステイの受け入れ

私の家では、ドイツ人の友人が泊まりに来たことはありましたが、日独協会のホームステイプログラムを通して1週間のホームステイを受けるのは初めてだったので、こちらも緊張していた部分があったと思います。しかし、終えてみて、毎日思わぬところで日独協会の会員の皆さんが、クラリッサを様々なところに案内して下さり、本当に助かりました。私と私の家族だけでは、彼女のホームステイの一週間をこんなに充実したものにできなかったと思います。彼女にとっても、たった1週間の間に新しい多くの人と出会うことができ、あらゆることを見聞きでき、より楽しく過ごせたのではないかと思います。クラリッサとの交流を申し出て下さった皆さんに感謝します。

小さなトラブルは多くありましたが、それらのひとつひとつが彼女にとっても私にとっても印象深く、日独の文化や価値観の違いを学ぶきっかけでもあったと思います。

「子ども達との交流を通して」

関　亦　　頼　子

今回はじめて、我が家でもドイツからの女子学生（クラリッサ・オッタバさん）のホーム・スティを実現させることができ、狭い家ながらもささやかな楽しい国際交流のひとときを持つ事ができました。それと共に、二人の女子学生（日独・交換留学生で元香大生であり現神大・院生の明神さんと現香大生・川田さん）とも知り合うことができましたことを嬉しく思います。クラリッサさんの香川県での滞在は、その一週間（3月2日～9日）の殆どを明神宅で過ごすものであり、我が家に来てもらったのはその内の二日間だけの短いホーム・スティでした。しかしながらも、我が家に在住する子ども達（小5の長男、小2の長女）にとって、初めての出来事であり、彼らにとってもかえ難い経験になったと思います。私自身も、彼女らとともに香川ならではの名所（？）を見てまわることによって、讃岐再発見の楽しい旅をすることができました。

クラリッサさんと伴なって私たち一行は、香川という車社会の最も象徴的な地である利点（？）を生かして、讃岐路を車でまわることになったのですが、快適なドライブのつもりが私の運転に「日本人の運転は、危険!」という印象を与えたのではないかと危惧しています。それでも彼女らと共に過ごした3日間は、はじめて体験することばかりでとても楽しいものでした。　何よりも手打ちうどんを一緒に作ったり、小豆島のそうめん作りを見学したり、香川県人でありながら今まで経験しなかったことを一緒にさせてもらうことで、改めて香川の文化に触れることが出来ました。彼女らと一緒に作って食べた手打ちうどんの味は、今まで食べたなかでも特に美味しく、クラリッサさんの麺のこね方、切り方は、なかなかのものでした。（私たちが講習を受けた「うどん大学」では、彼女が一番優秀な成績でした）もしかしたら、彼女がドイツに帰って、いつか「讃岐うどん」店を開店させてくれるのではないかと、密かに期待しているのですが・・・

我が家でのホーム・スティは、主に子ども達と一緒に「かるた」とりなどをして遊んで過ごしました。現在「かるた」は、子どものなかで（特に、小2の子ども）流行っていて、我が家には「かるた」だけはいろいろな種類を持っており、「生活習慣かるた」「歴史人物かるた」など、日本独特の「かるた」にクラリッサさんは興味を示してくれたようです。子ども達にとって、いつもだったら「後でね」と言われるところを、子ども好きな彼女は喜んで一緒に「かるた」とりをしてくれて、子ども達もまた大満足だったようです。

クラリッサさんと子ども達との交流は、言葉が通じなくても「遊び」を通してすぐに仲良くなれる、ということを直に体験する機会を持つことができました。もしかしたら子ども達にとって、異文化、異国、異民族などは何の問題もないことではないかと、認識する機会にもなったように感じます。例え、言葉、民族、国等が異なっていても、一緒に何かをして楽しい時を共に過ごしていくことだけでも、大人も子どもも関係なく「心」は通じあっていくものだな～と、実感することができたことを感謝しています。この経験を通して子ども達（特に、小5の子ども）は、ドイツという国を身近に感じ、「ドイツに行ってみたい」と言い出しており、我が家に新たな悩み（？）を齎しています。超短期のクラリッサさんのホーム・スティでしたが、彼女の訪問は、我が家に新たな風を吹き込んでくれたように思います。また、こうした新風が再び訪れてくれることを、子ども達と共に楽しみにしております。

5年ぶりの訪独記録

藤田　晋（巣鴨高校講師）

8月14日から27日まで、5年半ぶりにドイツを訪問した。5年前、旅行から帰国した直後に、5年後に再訪したいと考えていたことを憶えており、それを実現させたものである。また、今回も22日から27日までホームステイプログラムに参加させていただいた。今回は中心地から5kmほど西のレーダー夫妻宅に滞在した。本稿では、その期間の記録を紹介したい。

22日はフランクフルトを出発し、午前中はマインツを訪ねた。大聖堂やグーテンベルク博物館などを回った。この博物館では、初期の活版印刷の機械が展示されており、私の入場時には、ちょうどその実演が行われていたが、小中学生と思われるグループに、私に「名前は何というのか？」「空手を知っているか？」「ジャッキー＝チェンを知っているか？」と質問責めにあってしまった。

午後、ボンに到着し、レーダー夫人の迎えを受けた。今回の滞在先である、レーダー夫妻はともに障害児教育に携わる先生で、かつて岐阜大学でも指導・勉強されたこともあるという。部屋に案内され、落ち着いたところで、ご主人が戻って来られ、お茶を楽しみながら、これまでの旅行の話をしたり、これからの予定についての相談をした。

この夜は、メンヒさん等と食事に出た。少し小高いところにあり、「これがボン人の原風景だ」といわれる風景をバックに食事をとった。

23日はご夫婦ともに仕事に出られたため、一人でトリアーを訪ねた。ローマ時代からの伝統あるこの都市は、ドイツ最古の都市として、現地の人間にとっては特別な思いがあるらしく、トリアー訪問の話を現地の人々に向けたときには皆、感心した顔で私を見たものだった。実際、大通りを進む人々はほとんどがドイツの人々で、高齢者が多いように見えた。日本で言えば、東京の巣鴨商店街といったところだろうか。

トリアーではポルタ・ニグラ、市立博物館、中央広場、大聖堂、宮殿庭園ローマ時代の浴場、カール＝マルクスの生家、古代の円形劇場を訪ねた。マルクス生家では、東西冷戦期でさえも建物・資料は守られてきたという。社会主義の歴史に関する展示よりも、保存されてきた書物が興味深かった。

24日もご夫婦は仕事に出られたので、この日はアーヘンを訪ねた。カール大帝お気に入りの土地で、それにちなんだ建築が残されている。市庁舎では権力の象徴である剣や聖書の変遷、カール大帝の使用した衣服などの展示、世界各地の王冠を見、8世紀以降のアーヘン（ゲルマン）の歴史を様々なフレスコ画からたどることができた。つづけて、大聖堂と宝物館を見たが、ここにあったステンドグラスは、これまで見た他のどの教会や大聖堂よりも美しく思えた。

午後は「国境都市に来たからこそ」という旅をした。アーヘンは、ドイツ・オランダ・

ベルギーの3国国境が接している。駅前で見た広域の都市図には、3カ国の国境の接している場所（ちょっとした丘陵地）が記載されており、タクシーで行くこととした。

タクシーで移動中、ドイツとオランダの国境を越えることとなった。ところが、パスポートのチェックはなく、車は自由に往来している。運転手によると、国境警備隊の詰め所はその役目を終え、現在はインビス（日本で言うコンビニ）と化しているという。そのインビスを見ながら車は進み、目的地に着く。旅行案内書でもらう地図にも、旅行ガイドブックにも載っていないこの場所（レーダー夫妻も良く知らなかった）には、現地人の姿は多いものの、日本人の姿はなかった。ここにあるタワーに上がり、3国（ドイツ＝アーヘン、オランダ＝リンブルク、ベルギー＝ファーツ）を高所から眺めた。日射が強すぎたため、オランダのマーストリヒトまで視界が開けてていなかったのが残念だったが。ちなみに、この場所がオランダの最高点（332.5m）ということである。

ところで、タクシーの運転手は、妙な日本人がドイツ語を話すことに気をよくしたのか、車窓の風景はもとより、展望台でも丁寧な解説をしてくれた。また、写真撮影をしてくれたばかりか、記念に絵はがきまで買ってくれた。

この日の夕食時、ご主人から「自転車に乗れるか？」と尋ねられた。日本での生活には不可欠なもの。「もちろん大丈夫！」と返事をしたところ、ご主人は午前中余裕があるということから、翌日（25日）はサイクリングをすることになった。

午前中はご主人とボン近郊をサイクリングすることとなった。

8時過ぎ、まだ涼しい時間に出発し、農村地域を北上する。丘陵地に位置するのだが、低所では畑作、高所では果樹栽培と栽培地域の区分は明瞭である。しばらく北上した後、ライン川に向かって東へ下る。そして、船で対岸（右岸）へ渡った。ラインに架かっている橋はあまり多くなく、自動車・二輪車・歩行者が同じ船にのって渡ることが少なくない。このため運賃もかなり廉価である。

右岸のジーク地区に入り、しばらく遊水地（雪解け時を中心に、水位が上昇したときには水没する地域）を南に進む。途中、ラインの支流であるジーク川沿いに進んだが、ここには240種類の鳥類が残っていると言われ、ここにある渡船は手こぎ船に限定されていた（私の乗った船の場合、船が進む間もオールに鴨が留まったままで船頭さんが困っていたが）。

ジークからさらに南下し、ボイエルに来ると、ライン沿いに興味深いものを2つ発見した。一つはシーザー（カエサル）の像である。シーザーは紀元前後にここに橋を建設したという。当時のローマの技術からすれば、不可能ではないだろうが、2000年前の事業としては大変なものだったといえよう。もう一つは、1784年に起こった大洪水を記念するものである。1000年に一回という規模のもので、水際から2～300m離れたところでも平常時より14mの水位上昇があったという。日本ならば、100～150年に一回の規模に備えて、堤防や堰が設けられるところであるが、私が見てきた範囲には、堤防という堤防は見られなかった。小規模な洪水の頻度の違いもあるのだろうが・・。

さらに南下をするうちに、ローマ時代の港跡、ブドウ産地の北限に当たるブドウ畑、ケルンの大聖堂建設のために採掘された採石場などを見た。そして、再び船で対岸（左岸）に戻った。

左岸のバート＝ゴーデスベルクに渡った後、広大な公園、旧首相官邸と北上して市街地に入った。市庁舎前の広場で食事をとったが、ちょうど結婚式をやっている場面に遭遇できたのはラッキーだった。そのあと、大学地区を通って自宅に戻った。

夕方、ご夫婦と 3 人で、再び自転車に乗って市街地に向かった。前日からミュンスター（大聖堂）広場でワイン祭りが行われていたので、そこでワインと食事、雑談を楽しんだ。

26 日は午後からケルンに出かけた。メンヒさんさんが紹介してくれたという、日本語を学ぶ学生（ヒルケさん）が案内役であった。

最初に少し旧市街の教会を見た後、3 大「大聖堂」の真打ちともいえるケルン大聖堂に行った。日曜日のミサの準備をしているということで、聖堂内のすべてが公開されているわけではなかったが、アーヘンに引けを取らない、あるいはそれ以上のステンドグラス、あまりにも高い天井に圧倒された。館内を見た後は体力作りとばかり、大聖堂の塔に上ることとした。塔自体は 157m あり、509 段の階段を上ると 100m の地点まで行くことができる。狭く螺旋状になっている階段を全速力で行く人々もいて結構参った。また、最高点付近では吹きざらしになっているので、風の強さにちょっとおどおどしながらも、509 段を上がった。やはり日差しがあったために遠方までとは行かなかったが、見事な風景である。

塔を降りた後、隣りにあるローマ＝ゲルマン博物館に行く。数多くの貴重なモザイクなどを見ていたのだが、あまりの広さと入館時間の関係で、全部を見ることができないまま閉館時間となってしまった。

27 日はいよいよ帰国の日で、ご夫婦の見送りを受けて、ボンを離れた。

今回の旅行中も、地理を専攻する立場からいろいろと興味深い発見があった。特にライン沿いのサイクリングは思いがけない発見が多かった。また、ホームステイ前に訪ねたベルリンの変貌、ドレスデンの風景など、また 5 年後に再訪した際には（？）みてみたいものが多かった。その詳細は、自身のホームページ上に掲載しているので、興味のある方は、是非閲覧いただければと思う。

http://homepage2.nifty.com/SFujita/J/reise2k.htm

最後に、今回の旅行・ホームステイに当たってお世話をいただいた皆様に、お礼申し上げます。

"Mein 2. Besuch in Deutschland"

Shin FUJITA(Teilzeit-Lehrer in Tokio)

Letzten Sommer habe ich fuer 2 Wochen Deutschland besucht. Vor 5 Jahren bin ich einmal in Deutschland gewesen. Als ich das letztemal nach Japan zurueckgekommen bin, glaubte ich, dass ich 5 Jahre spaeter noch einmal nach Deutschland reisen werde.

Ich bin jetzt Erdkundelehrer, deshalb interessiere ich mich dafuer, wie sich Deutschland in 5 Jahren veraendert hat. Einige Entdeckungen sind fuer meinen Unterricht sehr nuetzlich. Fuer die Schueler war es interessant, glaube ich.

Vom 22. bis 27. August blieb ich bei der Familie Roeder. Am 22. August fuhr ich von Frankfurt ueber Mainz nach Bonn. Vormittagas besuchte ich Mainz, dort sah ich den Mainzer-Dom, das Gutenberg-Museum, u.a. Im Museum sah ich viele Kinder, die mich viel gefragt haben. Sie fragten nach meinem Namen, ob ich "Jackey Chain" kenne, und ob ich "Karate" kann.

Nachmittags fuhr ich nach Bonn. Auf dem Hauptbahnhof traf ich Frau Roeder, dann fuhren wir zu ihrem Haus. Nach der Ankunft im Haus traf ich Herr Roeder. Dann gingen wir in den Garten, dort tranken wir Tee und ich erzaehlte ueber meine Reiseplaene.

Abends kamen Frau Moench und eine andere Frau. Wir gingen in ein Restaurant auf einem Berg, von wo wir Bonn sehen konnten.

Am 23. August fuhr ich allein nach Trier. Trier ist nicht so bekannt bei Japanern, deshalb sah ich kein Japaner in Trier. Aber ich wusste, dass Trier ist die aelteste Stadt in Deutschaland, deshalb wollte ich die Stadt einmal besuchen.

In Trier sah ich das Stadttor "Porta Nigra", den Trierer-Dom, drei roemische Baeder, und das Karl-Marx-Museum. Im Museum gibt es viele Buecher von Marx, obwohl Trier frueher in West-Deutschland war. Das war etwas interresant fuer mich.

Ich ging auf der Hauptstrasse spazieren. Dort gab es viele alte Leute und viele Geschaefte fuer sie. Das war wie die "Jizo-dori-Strasse" in Sugamo,Tokio.

Am 24. August fuhr ich allein nach Aachen. Vormittags sah ich den Aachener-Dom und das Rathaus. Karl der Grosse mochte diese Stadt und er machte diese Stadt zu seiner Hauptstadt. Deshalb konnte ich viel ueber ihn lernen und viele Kronen der Welt im Rathaus sehen.

Nachmittags besuchte ich das Drei-Laender-Eck. Aachen liegt neben Belgien und den Niederlanden. Es ist attraktiv fuer mich(alle Japaner?), dass eine Grenze auf dem Boden verlaeuft. Und es ist interessant, weil drei Laender dort grenzen.

Ich fuhr dorthin mit dem Taxi. An der Grenze gab es ein Gebaeude, das frueher eine Zoll "war". Aber jetzt ist das ein Kiosk. Das war sehr interessant. An der Ecke gibt es einen Turm und der Taxifahrer und ich stiegen auf den Turm. Von dem Turm aus konnten wir drei Laender, die aneinander grenzen, sehen.

Ich hatte ein anderes Interesse. In Aachen kann man drei Waehrungen benutzen, die Mark, den Gulden, und den Franc. Im Geschaeft gibt es einen Hinweis ueber den Wechselkurs. Der taxifahrer sagte mir, dass er bei seiner Arbeit drei Geld benutzt, er hofft, der Euro kommt bald.

Am Abend assen wir im Garten. Als wir assen, fragte Herr Roeder mich, ob ich radfahren kann. Natuerlich kann ich radfahren, deshalb fuhren Herr Roeder und ich am naechsten Tag Rad.

Wir fuhren um Bonn ueber Sieg, Beuel, Bad Godesberg. Am Rhein fand ich eine Statue. Die ist von Caeser. Vor 2000 Jahre baute er einen Bruecke ueber den Rhein in einer Woche.

Abends fuhren wir in die Stadtmitte Rad. Auf dem Muensterplatz fand ein Weinfest statt. Dort assen und tranken wir bis spaet in die Nacht.

Am 26. August fuhren Frau Hilke und ich nach Koeln. Sie erzaehlte mir viel ueber Koeln. In Koeln sahen wir den Koelner-Dom und das Roemisch-Germanische-Museum. Im Dom bin ich auf den Turm gestiegen. Viele Kinder waren auch aufgestiegen, obwohl der Trepperaum nicht so gross war, und an diesem Tag war der Wind sehr stark. Es war etwas gefaehrlich.

Am 27. August musste ich nach Japan zurueckfahren. Am Morgen sagten Frau Roeder und ich "Auf Wiedersehen!" Dann fuhren Herr Roeder und ich zum Bonn-Hauptbahnhof. Dort sagten Herr Roeder und ich "Auf Wiedersehen!"

Das war meine zweite Reise nach Deutschland. Ich konnte gut reisen. Ich glaube, weil ich ein bisschen Deutsch sprechen konnte(nicht nur Reisekonversation). Aber wenn ich die deutsche und europaeische Geschichte besser kennen wuerde, waere meine Reise noch besser gewesen. Ich moechte Deutschland nochmal 5 Jahre spaeter besuchen. Bis zum naechsten Besuch will ich Geschichte studieren.

Vielen Dank fuer Herr und Frau Roeder, Frau Hilke, Frau Moench.

ドイツでの体験

上村　比登美

去年の夏休み、３週間ほど友達と２人でドイツへホームステイも兼ねて行きました。ユースホステルに泊まりながら各地を回り、最後の１週間はボンでホームステイをしました。私にとってドイツでの３週間はあまりにも早く過ぎていきました。目に入るものすべてが新鮮で新しいものばかり、そして分からないことだらけでした。そんな時たくさんの人に助けられ、語学のままならない私達の話を真剣に聞いてくれてとてもうれしかったのを覚えています。道の分からない私達と一緒に駅まで行って、事務の人に頼んでくれたり、何かを探していると向こうから「何か探しているのですか？」と声をかけてくれたこともありました。そしてデパートで商品を持ってレジに行くと、「これは良くない商品だから買うのをやめなさい」といった店員や、「ここからはタクシーで行く距離じゃない」と言ったタクシー運転手もいて驚きました。いい意味でおせっかいだなあと感じました。

ウルムからシュトゥットガルトへ向かう時、友達が先に乗った電車のドアがしまってしまい、一人で行かなければならないというアクシデントがありました。駅についてもユースまでの地図もなく、不安でいっぱいだった私に「一緒にいってあげる」といってくれた女の人がいました。無事着くことができ、友達と抱き合って喜びました。アクシデントのおかげでドイツ人の優しさを肌で感じました。

またドイツはリサイクルや環境についてきちんと考えている国だと思いました。商品の過剰包装はなく、スーパーで買い物袋を持っていくのは当たり前になっていました。ホームステイ先で水を使う量は決まっており、私達がタオルをすぐに新しいものにかえているのをホストファミリーに「Not　Ecology ね」と言われ、私達日本人の環境に対する意識の低さを痛感しました。日本に帰ってから買い物をする時、袋はいらないということが多くなりました。

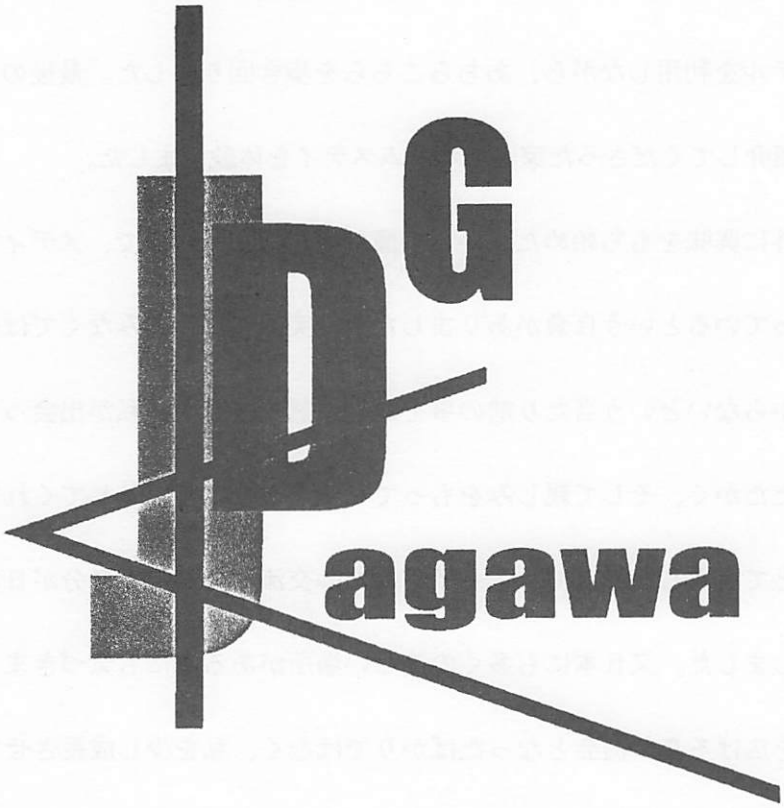
最初は人に道を聞くこともためらっていましたが、聞かなければ分からないし、聞けばきちんと答えてくれました。少し間違った言葉でも伝えようとする気持ちが大切なのだと思いました。ユースで出会った人や電車で隣に座った人など出会った人みんなに感謝したいです。今度訪れた時はもっと積極的にコミュニケーションがとれるようになりたいと思います。行ってみて本当に良かったです。

ホームステイの感想

喜多由紀子

去年の九月に友人と二人で三週間程、南方を中心に観光をしてきました。始めの二週間は、ユースホステルを利用しながら、あちらこちらを歩き回りました。最後の一週間は、香川日独協会が紹介してくださった家庭でホームステイを体験しました。

ドイツは、海外に興味をもち始めた頃からの憧れの場所だったので、メディア等を通してある程度は知っているという自負がありましたが、実際に行ってみなくてはやはりその素晴らしさは分からないという当たり前の事を痛烈に感じました。私が出会ったドイツの方々は、常にあたたかく、そして親しみをもって私達の事を知ろうとしてくれている事が伝わってきて、とても嬉しかったです。ドイツ人との交流を通して、自分が日本人である事実を強く意識しました。又日本にも多くの美しい場所がある事にも気づきました。今回の旅行は、視野を広げる良い機会となったばかりではなく、私を少し成長させてくれた気がします。近い将来、語学力を更に高め、再びドイツを訪れ、そして今度は自分の考えをもっときちんと伝えたいと思います。



Japanisch-Deutsch Gesellschaft KAGAWA ロゴ
（香川日独協会）

Degen 由美子

会員のご活躍・お便り

G8 環境大臣会合

1999年3月　ドイツ・シュヴェーリン

環境先進国　ドイツを訪問して

参議院議員　真鍋　賢二

香川日独協会の皆様には平素から温かいご支援を頂戴しておりますことに対し心から感謝申し上げます.

さて、私は環境庁長官在任中の２年前１９９９年の３月に Ｇ８環境大臣会合に出席するためドイツのシュヴェリーンに行って参りました。シュヴェリーンはドイツの最北部に位置する、古城のシュヴェリーン城がとても有名な川と湖に囲まれた美しい町です。その大臣会合の出席を機に環境先進国であるドイツの実情を視察するため様々な人と出会い、話を聴いてまいりましたので、そのいくつかをご紹介したいと思います。

まず、ベンツで有名なダイムラークライスラー社（シュツットガルト市）を訪問し、環境問題への取り組みについて意見を交わしました。特に日本ではハイブリット車を、ドイツでは燃料電池を積んだプロトタイプ車を披露した時期だっただけに排気ガスの削減などについて話がはずみ、燃料電池が次の時代を担う自動車として極めて見込みのある方式であると感じました。

次に、ドイツ国民の実生活を視察し、多くの方が買い物に行く時は自ら手提げ袋を持参しゴミを出さないよう努力しているほか、家庭でのゴミの仕分けにおいても何種類にも分けて出していました。日本で頻繁に使用されています「使い捨てカメラ」においては、いくらリサイクル率が高くても、日本のネーミングから資源の無駄使いとの印象があるということで、ドイツでは一切購入されませんでした。環境への配慮が確実に浸透していることを実感いたしました。

環境大臣会合では、京都会議で採択された、およそ２０１０年に向けて、９０年を基準に、日米欧がそれぞれ、６，７，８％の温室ガスの排出削減を図るとした京都議定書の目標がある中で、各国が国内の対策で優良な事例（ベストプラスクティス）の結果を報告しあうことを私が提案しました。これには、各国の大臣から賛同を得ることが出来ました。

昨年、国は循環型社会のための法律やグリーン購入法が制定するなど、環境問題への取り組みが行政、民間、国民の間で年々、高まってきています。環境先進国のドイツに負けないよう、私も香川日独協会の会員として、且つ、国会議員で作っている日独友好議員連盟の一人として、今後とも努力して参りたいと考えております。

最後になりましたが、会員皆様のご健勝と貴協会の益々のご発展を祈念致し、私の挨拶といたします。

青春の思い出

S.38 ハンブルグ時代のある一日

加藤元規

「モォトー、モォトー、お前の番だよ」下宿のお母さんが、ドアを叩きながら手洗いの順番を伝えてくれた。朝６時５分、まだ外は真暗。冬が近いこの季節でも寝室には暖房が入っていない。まだ寝床に居りたい気分だったが、目覚めは爽やかだった。

家族を含め５人で暮らしており、毎朝１５分ずつ各人に手洗いを割り当ていた。大黒柱の母はドイツ軍隊の会計課へバスで、息子はルフトハンザ航空の購買課へ車で、娘二人は上が絨毯商の秘書、下の娘が保険会社へ共に電車で通う関係で、短時間に皆んな出掛けてしまう。父は秘密警察の一員であったが、戦争中残念ながら故人となった。先ずは、苦労を耐え忍んできたが、現在は中流の生活をしている。

１ヶ月１人当たり当時の日本円に換算して１万５千円ずつ出し合って食費、家賃、光熱費、水道、掃除婦、洗濯代等の生活費を賄っている。モォトーの月給は９万円の時代。下宿人とはいえ、家族の一員として同じ条件で暮らしていた。今で云うホーム・ステーの感覚である。

洗面と着替えを終え台所で「おはよう」と挨拶し、母は炊事、妹が食卓の食器類の用意、姉がパン・ミルクの買出し、息子は各部屋の空気の入れ替えと植木の世話、モォトーは犬と散歩、それぞれの分担に移る。都会の家庭では、殆ど犬も同居しているので、外で用便さすために、朝早く犬と共に散歩している人によく出会う。犬はロックと名付けていた。

ロックはよく仕込まれていて、外に出るやモォトーに飛びついたりして喜びを示して、右に行ったり左に行ったりしながら用を達していた。交差点に来るとじっと立ち止り、振り向いてモォトーの指示を待っている。「ロック右へ廻れ」と言う程度は理解していた。

散歩から帰り、皆んな揃って美味しいコーヒーとパンにジャムをつけ食べてから、息子は食卓の整理、娘二人はそれぞれのお好みに合った手弁当（間食用）を作り、ナイロン袋に入れるハムサンドとリンゴ、バナナを一個ずつ分ける。食器洗いと掃除・洗濯は朝１０時頃に毎日やって来る掃除婦に任せてある。

モォトーは７時になると国電の駅まで娘達と腕を組んで楽しく出掛けた。小さいモォトーが持ち上げられるような格好で歩いたのも、寒さと石畳の歩道で、しかも急な坂道となっているので、両方とも凍った路面で滑らぬ用心からだった。駅の正面ではいつも同じ電車で通う姉の女友達がハッカ入りのアメ玉をしゃぶりながら３人を待っていた。

突然、妹は電車が入っているよと挨拶代わりに叫んで、３人は駆け足でホームに上がって行く。１等の喫煙席に飛び込むや静かにドァが閉まり発車した。

ドイツの列車は発車ベルが無く、殆どが笛だけでドァが全て閉まるとそれから静かに発車する。何時出るのか乗客には見当しがたいが、時間はまずまず正確な方である。１７ｋｍの距離で１ヶ月の１等定期代が４千円、１等料金は２等の５割増しで、２等の通勤費がそれぞれの会社から全額支給されていた。差額だけを個人負担していた。乗車時間は約２０分で、友達がハッカのアメ玉をしゃぶるかと尋ねたが、妹が逆に煙草をハンドバックの煙草ケースから取り出し皆んなに勧めた。モォトーも煙草を貰うと同時に彼女達に火をつけてやった。

今晩、明朝何をしょうかと尋ね合ったところ、結局、久方振りに波の出る室内プールへ明朝行くことにした。当時、波の出るプールとしてドイツでも大変有名となっていた。

出勤前に水泳に行くのだから、１時間早起きしなければならない。それでも月平均２－３回娘３人とモォトーは泳ぎに行っていた。母が付いて来たこともあった。

色々話し合っている内に電車は中央駅に到着した。ホームで「じゃ、また今晩」と言ってそれぞれの出口へと別れた。モォトーは会社への道中、肉屋で紙袋入りのミルクを買って７時４５分勤めている貿易会社に到着した。

１２時半、ちょうどモォトーが昼休みに入った時、姉から電話が掛かってきた。カフェー・レストラン「ウイーン」に今晩６時に来てくれ、何のためかと尋ねると来週母の誕生日に、皆んなで贈り物をしたいからだと答えた。それに妹にも連絡しようとしたが出来なかったの

で、一緒に連れて来てくれと依頼があった。
妹の行動についてはモォトーが一番良く知っていた、１週間の内、２－３度はお互いの会社から補助される１４０円の食券を交換し合い、色々な食堂でビールを飲みながら昼食をしていたからである。
会社はお互いに街の中心部にあって、妹は約３００m離れた近所で働いていたので、かような食券交換をして楽しく色々な食事をしていた。妹と昼食を約束していない時は、妹が行くだろうと思われる食堂の３軒を廻ると必ず出会えた。
「ウイーン」には既に４人とも定刻に集まり、コーヒー２杯分の入っているポットを注文すると同時にケーキも食べることにした。姉と友達が店のショウ・ウインドーまで選びに立ち上がった。姉が卓に戻ると、栗の載ったケーキを注文したよと言い終わると、「ところで、あんた達どんな方法で今日は連絡し合ったんだい」と尋ねた。「別に変わった方法じゃないよ、何時もの昼食時間だよ」とモォトーは返事した。
「でも、あんた達、何か特別な専用線でも有るんじゃあないの…　まあ、どちらでもいい事だけど」と姉は言い流した。
「お母さんの件はね、昨年のように同じプレゼントにならないように一応前以て相談して置きたかっただけなのよ、私ねテーブル掛けと下着に決めようとしているんだけど」と話を持ちかけた。約１時間半の話し合いをして帰路についた。
母が紅茶を作って我々の帰りを待っていた。
「今朝、皆んな予定通り帰ると言ったじゃないか、いったい揃いも揃って何をしていたんだ」と母が怒鳴り、口論となった。楽しく、愉快な生活を営んでいるようだけど、口喧嘩は絶えなかった。特に母と息子は激しかった。息子は家に居る時は、極端なほど楽天的な振る舞いをしていたからである。
遅く帰った３人はハム類をパンに載せ簡単な夕食後、居間に移ったら、息子が初対面の女友達を連れて来ていてブランデーとウイスキーを飲みながらレコードを聞いていた。皆んなに紹介して「お前達探偵物のテレビ見るんだろう」と言って、ウイスキーのボトルを提げて自分の部屋に彼女と共に消えた。
姉が「上等のブランデーがあるよ、私達も飲まない」とグラスを取り出し、結局テレビは見ずにレコードをかけ、絨毯の上で楽しく踊った。お酒とダンスで大変な汗をかいてソファーに腰掛けると、姉が顔と背中を拭いてくれる間に、最後まで、一緒に踊った妹も汗を気にしてトイレ洗面室へ行った。帰るなりモォトー、ソファをベットにして、例のマッチ棒を持って来てくれない。マッチで眉毛や顔を撫でるためである。明日のことも忘れ３０分ほど恋仲のようないい気持ちを出している間に、夜も静まってそれぞれの寝室へ移った、既に11時半だったがモォトーは直ぐ寝つかれず「若きウェルテルの悩み」を読み返した。

― 完 ―

Zugriffe：

E-mail　：　moto-kato@okym.enjoy.ne.jp

Home page：http://www.motofritz.de.vu/　（ nur in Deutsch geschrieben ）

http://ww4.enjoy.ne.jp/~moto-kato/

入会にあたって

松浦　洋三

小生、何十年も前に少しはドイツ語をカジつたのですがすっかり忘れており、ＡＢＣから高木先生に丁寧に教えて戴きました。
６０才を過ぎてはじめた外国語はなかなか頭に留まりません。でも趣味の一つとして、また頭の体操と思って今もＮＨＫのラジオやＴＶなどで細々続けております。
三年ぐらい前に独検４級をとり昨年３級に挑戦したのですが勉強不足で不合格でした。
今年の春、再び３級に挑戦するつもりでいます。

小生とドイツとは何の関係もありませんが、日本とドイツは歴史的にも密接な関係があり日本は明治の開国より医学・化学・法律・文学音楽・軍制に至るまで、あらゆる面で日本の文化に貢献してくれた国で、尊敬に価する国と小生は思っております。
また小生の小学生時代は戦争の時代であり、ドイツはナチス・ヒトラーの時代でありましたが、日・独・伊・三国同盟を結んだドイツの動静には子供ながらに関心を持っていた記憶があります。
先の大戦で日・独・共に世界を相手に戦い、共に敗戦国となったドイツに小生今も強い関心を持っております。
ドイツは深い歴史につつまれた文化の高い、しかも風景の美しい国です。小生もドイツ語を習い始めてから初めてドイツやオーストリァを観光旅行しましたが魅せられてしまい、その後続けて毎年行きました。そして小生の片言のドイツ語が通じた時は大変うれしい気持ちになりました。

そんな事やこんな事が小生この年令になってドイツ語を学ばせ、今なお続けさせている動機となったのかも知れません。

ドイツでのホームステイ、インターンシップ報告書

「ユース・イニシアティブ Expo 2000」におけるボンでの体験

香川日独協会学生会員 明神実枝

Email: mieallesgute@hotmail.com

目次

日独協会の交流を通して
≪参加にいたった経緯≫
≪参加したプログラムの概要≫
1. 主旨
2. 主なスケジュール
≪参加報告≫
0. ボンでの3週間
1. ボン独日協会の暖かい受け入れ
2. ボン新聞社(General-Anzeiger)での研修
3. シュレック(Schreck)家でのホームステイ

日独協会の交流を通して

考えてみると、私がドイツ好きになったのは、1997 年の夏(大学 3 年生の時)にフラっとボンにホームステイさせてもらったのがきっかけででした。その後、日独交流に係わるようになり、来日したボン大学の学生との交流機会を与えられ、ドイツ・ヴィースバーデン大学への留学がかない、留学中やその後も香川日独協会、ボン独日協会のメンバーの皆さんと交流する機会が与えられました。

ひとつひとつの出会いや交流は小さい、何でもないものでしたが、それらひとつひとつの出会いや交流が積み重なって、たった数年の間にドイツとの不思議なつながりを持たせてもらったように思います。

昨夏、「ユース・イニシアティブ EXPO 2000」という日独青年交流プログラムに参加する機会が与えられましたが、この経験は、それまでの香川日独協会、ボン独日協会の皆さんから頂いた貴重な機会だったと思います。感謝してお礼を言わせてもらいたいと思います。ありがとうございます。

他の日独協会の会員さんやまだ会員にではない方々が、小さな交流を重ね、それによって次の交流の機会が与えられ、さらに日独交流が深められますよう願いつつ、今回は、第 1 に、参加にいたった経緯、第 2 に、参加プログラムの概要、第 3 に、参加報告、特にボンでの独日協会の皆さんとの交流やホームステイ、インターンシップについての報告をさせてもらいたいと思います。

≪参加にいたった経緯≫

「ユース・イニシアティブ EXPO 2000」への参加のもとのきっかけは、日経新聞で記事を見つけたことにあります。しかし、香川日独協会と交流の深いボン独日協会にお世話になるとは思ってもいませんでしたから、これまでの様々な交流に導かれたと思えてなりません。

新聞記事がもとのきっかけ

2000年5月頃に日経新聞で、「ユース・イニシアティブ EXPO 2000」という日独青年交流プログラムへの参加者募集の記事を読みました。そして、そのプログラムでは、日本人大学生がハノーヴァー万博と首都ベルリン訪問に加え、ドイツ各地にある企業でインターンシップ(含む日系企業)及びホームステイをすることができると知って、迷わず申し込みました。

メンヒさんからの連絡

その後、選考試験があり、結果を待っていた頃に、突然メンヒさんからメールを頂きました。メンヒ(Mönch)さんは「あなたの履歴書を持っています。あなたをボンで引き受けて、ホームステイとインターンシップを世話したいのですが、いいですか。あなたが以前ホームステイしたシュレック(Schreck)さんが再びあなたのホームステイを受けてもいいと言ってくれていますが、それでいいですか。」という内容でした。

履歴書の発見

その経緯はこうです。ハノーファー万博2000実行委員会が世界の若者を5万人、万博に招待すると宣言し、日本の若者の世話を日独協会に依頼してきたのです。参加者の募集、選考はしたものの、受け入れをどうするか、というので、ドイツ全土の独日協会の代表者がベルリンに集まった会議で、手分けしてホームステイ、企業研修の世話をするような依頼があったそうです。

そのベルリンでの会議の後、メンヒさんは、今回のプログラム責任者となったビーレフェルト日独協会のノイエルトさんと、たまたま同じ列車に乗り合わせ、たまたま彼女が持っていた日本人大学生の履歴書を見ていて、私の履歴書を見つけたそうです。そして、有無を言わせずボンに持って帰ってくれたそうです。

2000年夏は、「ドイツにおける日本年」の行事やお客さんの接待で、ボン独日協会は予定がぎっしりだったようですが、私の履歴書を発見し、持って帰って「ぜひ世話をさせてくれ」と言ってきてくれました。こんなに嬉しいことはありませんでした。

様々な交流に導かれての参加と再会

この経緯は、本当に上手くできた話ではありますが、偶然とは思えません。初めてのボンでのホームステイ以来、香川日独協会の皆さん、ボン独日協会の皆さんとの交流が導いてくれたのだ、と思えるのです。

私の履歴書を見つけて持ち帰って下さったメンヒさんはもちろん、これまでの日独交流で、様々なドイツ人と知り合う機会、交流する機会を与えてもらった多くの方のおかげで、今回のプログラムへの参加に至ったと実感しています。

ドイツでは、さまざまな再会がありました。メンヒさんはもちろん、最初にホームステイさせてもらったシュレックさん。高松でホームステイしたことのあるクリスとは、ホストファミリーの山田さんに知り合う機会を与えて頂き、ボンでは会うことはできませんでしたが、連絡を何度か取り合いました。他にも、オルデンブルク独日協会会長のテラーさんは、私がこのプログラムに参加していることを聞きつけ、ホームステイ先を探してお電話を下さいました。

また、香川日独協会でご講演頂いた元在日ドイツ大使館の領事フィーツェさんとは、驚いたことに、ベ

ルリンの外務省表敬訪問の際に偶然お会いしました。「中村会長さんのお宅でおいしいおすしを一緒に食べたね」と、覚えて下さっていました。

どれも小さな交流、出会いでしたが、2回、3回と回数が増えるごとに、そしてそれが積み重なるごとに、ドイツとのかたいつながりを覚えることになりました。

≪参加したプログラムの概要≫

1. 主旨

2000年6月1日から10月31日の間ドイツ・ハノーヴァー市において開催される万博博覧会(EXPO 2000)を機に、全世界の青少年にドイツを紹介する為、ユース・イニシアティブ EXPO 2000 (Jugendinitiative Weltausstellung 2000)が設立された。独日教会連合会(本部・Lemgo 市)はこの活動の一環として「日独青年交流プログラム」を策定、(財)日独協会(本部・東京)と共同で、日本人大学生のハノーヴァー万博と首都ベルリン訪問に加え、ドイツ各地にある企業でインターンシップ(含む日系企業)及びホームステイを目的とした研修旅行を実施する。(本プログラム募集要項より)

2. 主なスケジュール

- フランクフルトで事前研修　2日間
- ホームステイと企業研修 21日間(3週間)
- ハノーヴァー万博訪問　2日間
- 首都ベルリン訪問　2日間

8月22日(火)成田空港を出発
8月22日(火)フランクフルト空港に到着
8月23日(水)フランクフルト大学にて事前研修
8月24日(木)2グループに分かれて企業見学(Opel、Wella 等)
8月25日(金)研修先に向けて出発(ボンに向けて出発)
　　ホームステイ開始
8月28日(月)企業研修(3週間)開始
9月15日(金)企業研修終了
9月18日(月)ハノーヴァーへ出発　午後 EXPO 見学
9月19日(火)EXPO 見学　夕方ベルリンへ出発
9月20日(水)ベルリン市内見学　夕方外務省での表敬訪問
9月21日(木)ベルリン市内見学　午後フランクフルト空港へ
　　夜、成田空港に向けて出発
9月22日(金)成田空港に到着、解散

≪参加報告≫

0. ボンでの3週間

私を含めて 5 人の日本人学生が、8 月 25 日から 9 月17 日までボンに滞在しました。私はシュレック(Schreck)家にホームステイしながら、ゲネラル・アンツァイガー(General-Anzeiger)というボンの新聞社で企業研修する機会を頂きました。研修は月曜日から金曜日、9 時から 16 時までで、16 時以降や週末は家族と過ごしたり、ボン独日協会の皆さんと交流する時を持ったりと、大変充実した時間を過ごすことができました。

まず、今回のボン滞在が大変充実したものになったのは、ボン独日協会の皆さんに暖かく迎えて頂いたことにあります。ホームステイや研修先の手配でお世話になり、会員の皆さんと交流する機会を積極的に提供して頂き、一緒に楽しい時間を過ごすことが出来ました。

例えば、デュッセルドルフへのバス旅行、講演会への参加。ホストファミリー以外のドイツの家庭を訪問し楽しむ機会、ケルンを案内してもらう機会、毎週水曜日には興味のある人が気軽に集まってビールを飲みながら日独交流に明け暮れる集まり、スタムティッシュ(Stammtisch)などです。

次に、企業研修について。企業研修は私にとって初めての経験であり、語学の面でも自信がなかったので不安でしたが、研修期間には非常に多くのことを経験し、学ぶことが出来ました。ゲネラル・アンツァイガー(General-Anzeiger)のマーケティング部門に配属して頂き、企業の ABC を習うと共に、新聞購読者に提供する行事のお手伝いもさせて頂き、ボンという地域をよりよく知ることができました。

そして、ホストファミリーとの楽しかった思い出も数多くあります。3週間という長い期間、私を家族同然に暖かく迎え入れてくれ、ドイツの生活習慣や文化を教えてもらったり、分からないドイツ語の言葉を教えてもらったりすることは毎日でした。一緒に料理をしたり、テレビを見たり、買物に行ったり、という日常生活の小さな出来事の中でも新しい発見が多く、ひとつひとつ丁寧に教えてもらった思い出が多く残っています。

以下では、それらの楽しかった思い出のいくつかを詳しくご紹介したいと思います。

1. ボン独日協会の暖かい受け入れ

8月 25 日、私達はボン駅で独日協会の数名の方に暖かく出迎えて頂き、早速、連絡事項と合わせていくつかのプレゼントを頂きました。

ひとつは定期券。ボン滞在中に、ボンとその周辺、ケルンまでの鉄道や地下鉄に乗り放題の定期券です。そして、すべての公共交通機関の時刻表、ボン市内の地図が掲載されている観光ガイド、ボンという街の歴史がわかる本も頂きました。また、研修中の昼食代も世話して頂きました。

「切符の買い方が分からなかったり、電車の乗り方が分からなかったりして時間を無駄にするのではなく、これらを活用してボンの街のあらゆるものを見たりして楽しい有意義な時間を過ごして下さい」というメッセージも頂き、あらかじめ予想される困難が起きないように気遣って頂きました。これらによって、私達は異国の知らない街ボンをすぐに身近に感じることが出来ましたし、バリアフリーの状態で、自分の意志

によって行動することが可能でした。

また滞在期間中、私は多くのドイツ人に知り合い、ドイツを紹介してもらったり、日本について説明したり、時にはディスカッションしたりして、より楽しい時間を過ごすことが出来ました。それらの機会は、日独協会の行事、独日協会会員の方々の配慮いただいて実現されました。

（写真①:8 月 25 日　到着後、ボン独日協会の皆さんに温かく迎えられ、昼食をご馳走になった。）

講演会　8月29日

ボン独日協会において講演会が開かれ、「平安時代から 20 世紀までの日本庭園芸術例」("Beispiele der japanischer Gartenkunst von der Heianzeit bis ins 20.Jahrhundert")という題で、メンヒ(Mönch)さんから日本庭園の変遷、魅力を聞かせて頂きました。

デュッセルドルフへのバス旅行　9月2日

ボン独日協会の行事であるデュッセルドルフへのバス旅行に参加し、「ドイツにおける日本年」の閉会セレモニーやイベント、花火などを見ました。市庁舎の前からおみこしが担がれたり、ライン川沿いの広場で盆踊りが踊られたりと盛大に祝われていました。よく見ると、大勢のドイツ人が半被を着ておみこしを担いでいたり、盆踊りを踊っていたりしました。日本とドイツの文化が入り混じった光景が見られ、嬉しくも思いました。

ケルン観光　9月7日

この日は会社帰りに電車に飛び乗ってケルンに行き、そこでボン独日協会会員のカイとビリー(Kai & Willi)にケルン大聖堂やアルトシュタットを案内して頂きました。カイとビリーはとても気さくで面白い二人でした。私たちに、ケルンの人が大好きなジョークをいくつか教えてくれたり(残念ながら、その面白さがかわからないこともありましたが. . .)、ケルンで伝統的に行なわれている面白い人形劇についても説

明してくれました。また、ケルンの人が何を飲むか、何を考えているか、どういうときに良く笑うか、などボンの人とは一味違う一面を垣間見せてもらいました。

スタムティッシュ　毎週水曜日、ベートーベンの前に集合！

ボン独日協会会員の皆さんやその友人と私たち日本人学生は、毎週水曜日、ボン中心市街地のマルクト広場にあるベートーベンの銅像の前に集合して毎回新しいお店にビールを飲みに行きました。ある時はライン川沿いの屋外ビア・ガーデンで、ある時はボンの伝統的な飲み屋でケルシュやボンシュを味わいました。

おかげで多くの人と知り合い、グラスを片手にいろいろな話をしました。ドイツや日本について、ある大学生とは専攻分野の話まですることが出来ました。また、この集まりに今回のユース・イニシアティブ・プログラムの日本側の責任者である佐藤さんと松浦さんが駆けつけて下さったこともあり、私達の充実した経験談をお話したことも思い出されます。毎回違うメンバーを交えながら飲んだビールは最高でした。

ボン市表敬訪問　9月12日

市長助役(Bürgermeister)のハウシールド(Haushild)さんに市庁舎に招かれて、表敬訪問する機会が与えられました。ボンには1人の市長の下に市長助役が5人います。この5人は常勤ではなく、別に仕事を持ちながらボランティアのような形で任務を果されています。

そのうちの1人のハウシールド(Haushild)さんに、かつて天皇陛下もご訪問の際に通されたという部屋に通して頂き、そこではボン独日協会会員の皆さん、ボンで研修した 5 人の日本人学生とそのホストファミリーが招待されました。ハウシールド市長助役は歓迎の意を表すために、日本語でスピーチをされました。大変暖かく迎え入れて頂いたことに非常に感謝しています。

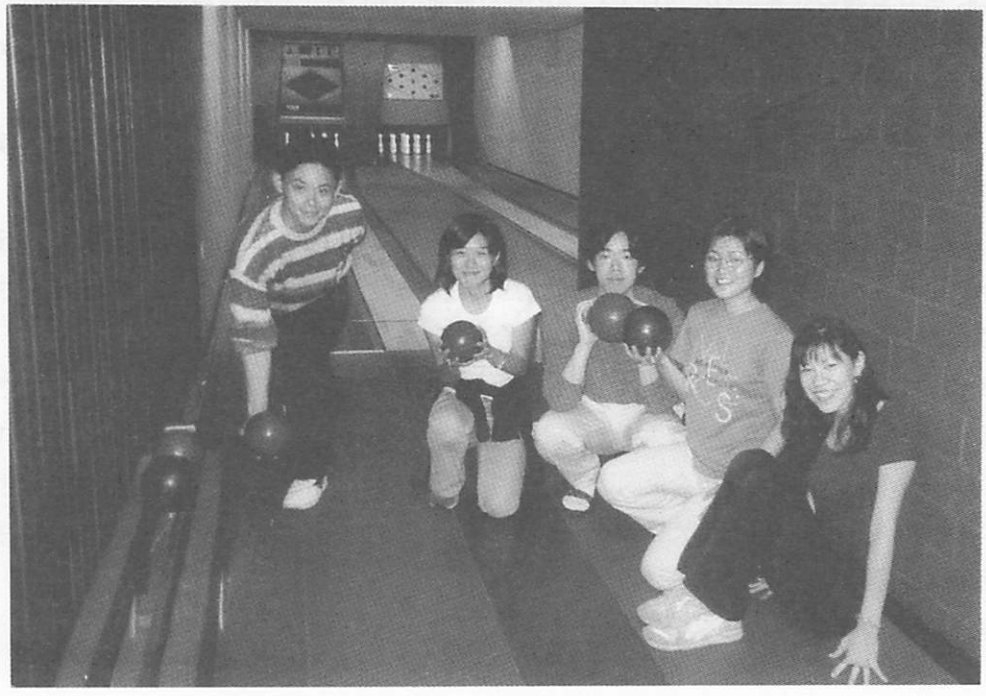
(写真②:9月12日　ボン旧市庁舎内で、市長助役のハウシールドさんとお世話になった5人の学生)

ケーゲル大会 9月15日

私達の企業研修の最終日に、ボン独日協会の会員の方々やホストファミリーが集まってくれ、打ち上げと送別会を兼ねてケーゲルを楽しみました。

ケーゲルというのはボーリングに似たスポーツです。しかしルールがかなり違います。ボーリングはピンを数多く倒した人が勝ちですが、ケーゲルは毎回ルールを設定し、例えば中央の 3 本だけを倒せたら勝ち、端の一本が倒せたら勝ち、といったように少々テクニックが必要なゲームです。チームで競うことも可能で、例えば1本倒しを何回、2本倒しを何回、、、というルールを決めて、決められた本数を決められた回数だけ先に倒せたら勝ち、となります。驚いたことに通常ケーゲル場は地域の飲み屋の地下にあり、ビールを飲みながら延々と楽しむゲームだそうです。

ドイツのひっそりとした場所にある、でもかなり盛り上がるゲームに熱中できてとても楽しかったです。仲良くなった仲間達との時間だったので余計に楽しかったのかも知れません。



（写真③:9 月 15 日 ケーゲル場でのお別れパーティ）

ケーニクスヴィンター訪問 9月17日

ケーニクスヴィンターは、ボンより南、ライン川の西側に位置します。そこに住んでおられるランゲ夫人は、息子さんが独日協会会員のメンバーである関わりから、独日協会を通じて私を招待して下さいました。

訪問させて頂いたランゲ夫人の家は昔ながらの木組みの家で、しかし内装は家具職人のご主人が腕によりをかけられた、大変魅力的なお宅でした。昔ながらの家は面積が大きくなく天井も高くなく、駐車場がない、といった不便さもあるけれど、内装を工夫することで、自流の生活スタイルを大切にされていました。個性や自分のスタイルを大切にすることを学んだように思います。

ランゲ夫人は毎日ポニーに乗るということで、私も乗せて頂きました。ポニーに乗った経験がなかったので、恐る恐る乗っていましたが、馬の上からの視界やそこで吸った空気は最高でした。乗馬のコツは「ただ自然に」だそうです。また、ご主人からは「人が背中を掻いてもらうと気持がいいように、馬もそうしてもらうと気持がいい。ごく当り前の態度で接したらいいんだ」とアドバイスを頂きました。

2. ボン新聞社(General-Anzeiger)での研修

私の研修先はボン新聞社(General-Anzeiger)のマーケティング部門でした。企業研修は初めてで、しかもドイツ語力にも不安がありましたが、振り返ると多くのことを勉強させてもらったことに気づきます。

マーケティング部門の業務は主に、購読者向け行事等の企画・運営、新聞を教育教材とする学校との共同プロジェクト、そして広告作成関連の業務です。私はこれらの業務のアシスタントとして資料の作成・準備、当日会場の設営から片付けまで、あらゆる場面に同行させてもらいました。3 週間という短い期間ではありましたが、この機会を通して多くのことを体験することができました。特に印象的だったのは次の 3 点です。

第 1 に、全般的なドイツ企業の企業文化に当たることも含めて、ボン新聞社の企業文化を体験することができました。

第2に、ドイツの企業と教育の関係を見ることができました。具体的には、私が今回経験できた研修制度(Praktikum)と、高校卒業後に 1～2 年間勉強しながら実習する実習制度(Ausbildung)です。職場が同時に社会教育の場でもあり、学生に広く機会を与えてくれます。

第 3 に、私の研修先のボン新聞社は、非常に社会貢献度の高い取組みを行なっていることです。私が研修中に関わったプログラムでは大きな取組みが 2 つありました。1つは、ライン川沿いの小高い山脈のハイキング(Volkswandertag)を企画したことです。もう 1 つは、ボン新聞社が教育現場で起きている問題に耳を傾け、新聞を教材とした授業を支援するプロジェクトです。これらの取組みは非常に社会貢献度が高いという印象を受けました。

これら 3 点に絞って、私の多くの体験の一部を紹介したいと思います。

(1)企業文化:日本との違いに驚いたこと

研修初日から驚いたことは数多くありました。私の研修先ボン新聞社に特有の企業文化も多くありましたが、ドイツ特有の企業文化と思われるものも体験することができました。この点の曖昧さは残っていますが、いくつか紹介したいと思います。

コーヒーワゴン(Kaffee Wagen)

研修の初日は 9 時に出社し、マーケティング部門の社員の皆さんに紹介されました。そしてその数分後に「コーヒー、コーヒー」という声を聞きました。この会社では、9時と13時にコーヒーワゴンが社内の各階にコーヒーとサンドイッチやドーナツを乗せて売りにきます。仕事に熱中されていた上司も、この時はコーヒーカップを持って列に並びます。もちろん自分のコーヒーは自分でとりに行きます。

また、他の企業で研修した友人は上司にコーヒーを入れてもらったと言って恐縮していました。社内の

人間関係の持ち方が日本とドイツでは異なるようです。面白い習慣だと思いました。

見当たらない残業

ドイツ人は残業せず、勤務時間が過ぎるとすぐに帰宅するということを聞いていましたが、本当にそうでした。また、上下関係からくるややこしい慣習、例えば新入社員が上司より先に帰ってはまずい、といったものもなく、とにかく自分の責務が終わるとあっさり帰宅していました。日本のサラリーマンがうらやましがりそうな状況でした。

明確な仕事分担

私が主に研修させてもらったマーケティング部門では、各人に明確な仕事分担がありました。例えば、1人は行事の企画担当、1人は広告とその他のプロジェクト担当、1人は広告のグラフィック担当、といったようにです。お互いに情報交換はするものの、基本的に仕事は各人が責任を持たされた仕事をこなしていました。

日本の企業では責任の所在がはっきりしていない、という一般論を耳にしたことがありますが、この会社では責任の所在が明確にされており、各人が意識しているようにも感じました。

快適な職場環境

会社はボン郊外に位置しており、オフィスからの眺めは最高でした。さらに驚いたのは、一オフィスで働く社員数は数人と少なく、各部門の部長には個室が与えられているということでした。大部屋に簡単な仕切りのある日本企業の狭い職場をイメージしていたので、それに比べると快適な職場環境が与えられているという印象を受けました。

（写真④:9 月 16 日　街のお祭り（Stadtfest）での販促活動に参加。仕事仲間たちと。）

(2)ドイツ企業と教育制度

研修制度(Praktikum)

研修制度(Praktikum)は一般的に大学生を対象にしており、2、3ヶ月から 6 ヶ月間、正社員のアシスタントとして仕事を手伝いながら、仕事の流れや細かい作業を実践的に学ぶことを目的としています。私の研修先では、私以外にも夏休みを使って 2 ヵ月間研修している大学生がいました。

この研修によって、各企業の即戦力の人材を育てられる訳ではないと思いますが、大学生にとっては豊かな経験が得られ、理論と実践の溝が埋められる良い機会です。後に大学生を雇う企業側にとっても豊かな経験を持つ学生の雇用は歓迎しています。両者にプラスになるよう作用するシステムです。

実習教育制度(Ausbildung)

実習教育制度(Auszubildung)は高校卒業後の学生を対象にしており、期間は 1～2 年です。1週間の半分は理論の授業を受け、残りの半分は企業内のすべての部門で 1～2 週間ずつアシスタントとして仕事をします。私の研修先にも 10 数人の実習生がいました。

実習教育を通して彼らは理論と実践を学べるだけでなく、どの部門が自分に適しているかを探すことができます。また、彼らは取引先の卸売業者の見学に行く機会も与えられ、就職前に1つの仕事の包括的な流れを捉えることができます。非常に充実した社内教育制度だと思いました。

(3)社会的存在としてのボン新聞社

中学生を対象にした新聞を読むプロジェクト「Schüler Lesen Zeitung」

ボン新聞社は、新聞を教材とした中学生の授業を支援するプロジェクトに取り組んでいます。ボン新聞社は「生徒の活字離れ」という教育現場で起きている問題に耳を傾け、新聞の 2 週間無料サービスを提供して、クラスで新聞を教材として勉強してもらうことを提案していました。提案を受け入れたクラスは、期間中、授業で新聞について勉強し、新聞記事が単なる事実でなく背景についても詳しく解説するものであること、他のメディアとは役割が異なること等、新聞について学びます。そして、実際に自分達で取材したり、インターネットで調べたりして記事を書いていきます。

ボン新聞社が単に新聞を提供するだけでなく、新聞社見学、ジャーナリストの話を聞く機会などを提供することによって、その後も対話が途絶えず、かえって効果的にプロジェクトが進んだことです。

ボン新聞社と学校側の話し合い

このプロジェクトの始まりは、地域の約 100 の学校からの先生方と、ボン新聞社の編集長と数人のジャーナリスト、マーケティング担当者との話し合いでした。この話し合いでは、学校教育の現場の問題を理解し、より効率良く新聞の授業を導入するための意見交換がなされました。そして、ボン新聞社は無料購読を提供するだけでなく、このプロジェクトの期間中、クラスの希望に応じて新聞社の見学の機会を提供したり、ジャーナリストを教室にゲストスピーカーとして派遣したりすること、さらに良く書けているものは実際に新聞に掲載することなどを提案していました。

ジャーナリストの学校訪問

一度、ジャーナリストと一緒にクラスを訪問しました。そこでは、ジャーナリストが話した後の質疑応答も活発でした。生徒達のモティベーションが上手く引き出されているように感じられました。さらにそのジャ

ーナリストは、生徒達が実際に書いた記事ひとつひとつに目を通し、アドバイスをしていました。このプロジェクトで特にすばらしいと感じたことは、対話を大切にしている点です。

プロジェクト全体に関わった感想

このプロジェクトによって、ボン新聞社は未来の世代の読者育成につながる契機をつかむ可能性がありますが、購読者を獲得できる訳ではありません。したがって、ほぼ100%社会貢献活動と言ってもよいような取組みです。教育現場の問題は、若者の活字離れのようです。ボン新聞社が行なった調査では、若者が新聞どころか本も読まない実態が明らかにされていました。そんな若者達に新聞を読む習慣を教えてくれる、この新聞社の包括的取組みは、未来の社会に安心感を抱かせます。

アイデアを頭で考えるだけでなく、実践を重視する、しかも長期的に取組みを積み重ねるこのプロジェクトは、ドイツらしさを感じさせるものでした。

3. シュレック(Schreck)家でのホームステイ

私のホームステイ先のシュレック(Schreck)家は、日本好きなホストファーザーのヘルムート(Helmut)、お料理や裁縫が得意なホストマーザーのクラウディア(Claudia)、それに2人の息子、18歳のマーティン(Martin)と15歳のカイ(Kai)の4人家族でした。3週間彼らと一緒に過ごし、楽しい思い出をたくさん作ってもらいました。

和太鼓演奏会

ホストファーザーのヘルムートは日本好きで、3年前から和太鼓を演奏されています。私の滞在中にも、彼の所属するデュッセルドルフの和太鼓グループ「震太鼓」が演奏会を開くということで、聴くことができました。和太鼓のことはよく分かりませんが、演奏会で日本的な雰囲気を感じました。日本では演奏者が減りつつある日本の伝統的な楽器がドイツで息を吹き返していることには驚きました。

さらに驚いたことには、ヘルムートは和太鼓をひとつ自分で作ったというのです。同じ和太鼓グループに和太鼓作成の経験者がいたこともひとつのきっかけですが、ワインの樽を見て似ていると思い、作り方を聞いたことも和太鼓作りの基礎になっているようです。全く異なる文化を持った日本とドイツですが、似たようなものを持っていることに気づかされました。昔の人の知恵が一方では楽器を生み出し、他方ではワインの樽を作り出した、ということでしょうか。

和太鼓に挑戦

実際に、私も和太鼓演奏に挑戦させてもらいました。ホストブラザーのマーティンとその友達マリーも以前から挑戦してみたいと言っていたことから、4 人でデュッセルドルフの練習場へ行きました。ドイツ人のヘルムートに日本人の私が日本の楽器を習うのは、どこか落ち着きませんでしたが、一方でヘルムートが理解する日本から、私は自分の国について大いに学ばせてもらったと思います。

ライン川地域の郷土料理

日曜日の夜は、ヘルムートとクラウディアと一緒に、近所の居酒屋(Kneipe)で食事をしました。そこではライン川地域の料理のライベクーヘン(細かく刻んだジャガイモの天ぷらパンケーキのようなもの)、ヒンメル&エアデ(焼いた血液のソーセージとマッシュポテト、りんごの摩り下ろしたもの)に挑戦しました。話によると、これらの郷土料理は昔は貧乏人の食べ物だったとか。そういえば、地域で豊富に取れて単

価の安いジャガイモ中心の料理でした。

考えてみると、私の生まれ故郷の高松には「うどん」という郷土料理がありますが、これはお米が買えない貧しい人の食べ物だったという由来を聞いたことがあります。どこの土地にも知恵が絞られて定着した郷土文化があり、どれにも感心させられます。

ドイツ家庭の台所

外食した時に食べたライベクーヘンという細かく刻んだジャガイモの天ぷらパンケーキのようなものが気に入ったことを知ったクラウディアは、早速作り方を教えてあげる、と言ってくれました。また、私がライスを食べたいというと、じゃあ中国料理を一緒に作ろう、と提案してくれました。

そんなこんなで、一緒に夕食を作る機会がしばしばありましたが、その時に特に印象的だったのは、ドイツ人家庭のキッチンが、まるでドラえもんのポケットのようだったことです。ピーマンの中身をとりのぞくための道具、ひもを引っ張ればレタスの水を切ることのできるボール、にんにくの皮むき用、潰し用の道具など、あらゆる秘密兵器が登場してきました。私はいちいちそれらの新兵器に感激していたので、ホストファミリーからにんにくの皮むき用具、潰し用具をお土産にもらいました。

リスク(Risiko)

ドイツのZDF放送では、毎日"RISIKO(リスク)"というクイズ番組が放送されていますが、滞在期間中に、ヘルムートが回答者として出演した放送を見ることが出来ました。このクイズ番組は、回答者が得意とする分野のテーマを自分で取り上げ、それについてのクイズを 4 ラウンドまで挑戦し、すべて正解ならばポイント分の賞金を得られますが、一問でも不正解だと"ゼロ"になってしまう、という高いリスクを背負って挑戦するクイズ番組です。

ヘルムートのテーマはもちろん「日本」でした。私も答えられないような日本についての質問に次々と答え、第 4 ラウンドの、あと 2 問で勝ち、というところまで進みました。彼が日本について本当によく知っていることに対して頭が下がる思いでした。何にでも挑戦するヘルムートに拍手するのみでした。

(写真⑤:9 月 18 日　出発の朝。ボン中央駅で、見送りに来てくれたホストファミリー、独日協会の会員さんらと。)

GA
28.9.00

Japanische Studenten entdecken Deutschland

PROGRAMM Deutsch-Japanische Gesellschaften organisierten den Aufenthalt und ein Praktikum

Von **Carsten Schlüter**

In Deutschland ist alles ganz anders als in Japan, findet Mie Myojin. Und sie muss es wissen, denn die 24-jährige BWL-Studentin kommt aus Kobe und absolvierte ein dreiwöchiges Praktikum in der Marketing-Abteilung des General-Anzeigers im Rahmen einer Initiative des Verbandes der Deutsch-Japanischen Gesellschaften zum Japanjahr. Diese ermöglichte 180 japanischen Elitestudenten eine Reise nach Deutschland mit einem Praktikum und einem Abstecher nach Berlin und zur Expo.

Die Anreise nach Deutschland mussten die Studenten selbst zahlen. Sie bekamen ein von der Bundesregierung speziell ausgestelltes Visum, durch das sie während ihres Aufenthalts keine Arbeitsgenehmigung brauchten. Untergebracht waren sie bei Gastfamilien. „Die Funktion dieses Programms ist, den Jugendlichen Deutschland als modernes umweltorientiertes High Tech- und Wissenschaftsland mit seiner Kultur und seinen Traditionen sozusagen von innen her zu präsentieren", erläutert Marianne Mönch, Vizepräsidentin der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Bonn.

Mie Myojin gehört zu den Studenten, die aus 600 Bewerbern ausgewählt wurden. Sie freut sich über ihr Praktikum und den Besuch in Bonn. Sie ist bereits zum zweiten Mal in Deutschland. Ein Jahr hat sie schon in Wiesbaden gelebt und dort angefangen, Deutsch zu lernen. Ihr Ziel ist es, nach dem Abschluss ihres Studiums, in anderthalb Jahren, in Deutschland zu leben und zu arbeiten. „Die Deutschen sind viel lockerer als die Japaner", begründet die Studentin ihre Entscheidung. „In Japan muss man immer genau überlegen, was man sagt, um die Etikette zu wahren. Hier kann ich ganz offen reden, über das, was ich möchte und mit den Leute darüber sprechen." Außerdem schätzt sie die Berufschancen für Frauen in Deutschland höher ein als in Japan. „Die Arbeitslosenzahl ist bei uns zwar nicht so hoch, aber die Tendenz steigt."

Auch von Bonn ist Mie Myojin begeistert. „Es ist eine sehr schöne Stadt, nicht zu groß und nicht zu klein. Es gibt so viel Interessantes hier." Die Museen und die Biergärten findet sie toll und auch die Landschaft hat es ihr angetan. Deshalb gehört auch der GA-Wandertag zu den schönsten Erinnerungen, die sie mit zurück in ihre Heimat genommen hat. Neben dem Besuch auf der Expo versteht sich. Einziger Wermutstropfen für die Studentin: das Essen. „Die Portionen hier sind immer so groß." Dafür koche ihre Gastfamilie sehr gut. Bei einem Empfang im Alten Rathaus, bei dem Bürgermeister Ulrich Hauschild die fünf japanischen Studenten, die in Bonn wohnten, empfing, bedankte sie sich auch im Namen der anderen für die Unterstützung der Bonner Firmen und die Gelegenheit für den Besuch. „Wir haben viel Spaß gehabt und eine Menge Neues gelernt." Sie freut sich schon, ihre Gastfamilie mal in Kobe begrüßen zu dürfen.

Standen der JuLe-Redaktion Rede und Antwort (von links): Filip Orság (Tschechien), Samira Baddour (Marokko), Elsa Manna (Eritrea), Noriko Kanemitsu (Japan), Christoph Heider, Leiter des akademischen Auslandsamtes, Fatmar Ucar (Türkei), Christine Mourdoukoutas (Griechenland). Fotos: RMB/Kühner

Elektrotechniker von der Elfenbeinküste

Die ausländischen Studenten an der Wiesbadener FH kommen aus 85 Nationen / Bewerberzahlen steigen

Von JuLe-Redaktionsmitglied Markus Lachmann

Aus rund 85 Nationen kommen die ausländischen Studierenden an der Fachhochschule Wiesbaden. Junge Menschen von der Elfenbeinküste, aus Argentinien oder Australien studieren in der hessischen Landeshauptstadt Elektrotechnik, BWL oder Informatik. JuLe sprach mit sechs von ihnen über Zukunftswünsche, Probleme im deutschen Alltag, Fremdenfeindlichkeit und Nachtleben.

„Made in germany" hat die Japanerin Noriko Kanemitsu bereits im Elternhaus kennen gelernt. Ihre Eltern, grinst die 23-jährige Gaststudentin – sie studiert International Business Administration (IBA) – fahren ein deutsches Auto, besitzen Meissner Porzellan und benutzen einen deutschen Staubsauger. Aber dies war für Noriko, die an der Universität in Kagawa Marketing studiert, nicht der Grund, nach Wiesbaden zu kommen. Sie möchte gerne Erfahrungen im Ausland sammeln und später in Europa oder den USA arbeiten, eventuell als Bankerin. Drei Jahre

Zwei Semester Gaststudentin: Noriko Kanemitsu aus Japan.

hat sie in Japan Deutsch gelernt. Doch es hapert noch immer: Im vergangenen Semester fiel sie bei zwei von vier Prüfungen durch, weil sie schlichtweg die Fragen nicht verstand – erzählt die Japanerin in gutem Deutsch.

Zwei Semester bleibt Noriko insgesamt hier – dann geht es zurück in die Heimat. Dort wird sie ihren Eltern vermutlich berichten, dass deutsche Studenten „viel aktiver" als die japanischen sind und ihren Professoren oft Löcher in den Bauch fragen.

Aus der Partnerhochschule in Brünn/Tschechien kommt Filip Orság, 22 Jahre alt. Er studiert Informatik, hat sich auf Sprachsignalverarbeitung, digitale Bildverarbeitung und neuronale Netze spezialisiert. Das Stipendium finanziert der Rotary Club mit monatlich 1000 Mark. Filip lernte zwar schon vor acht Jahren deutsch, durfte aber seine Sprachkenntnisse auf einem Kurs vier Wochen lang in Fulda auffrischen – ermöglicht von der FH und vom Land Hessen. Er wohnt im Studentenwohnheim Camp Pieri, dort fühlt er sich wohl: Ein Zimmer ganz allein, das gibt es in Brünn nicht. Dort müssen sich Studenten Zimmer zu dritt teilen, verrät der 22-Jährige. Er möchte später gerne promovieren, am liebsten parallel in Deutschland und Tschechien. Das Niveau im Informatikstudiengang, weiß Filip, sei an beiden Fachhochschulen gleich, allerdings in Brünn eher theoretisch orientiert. In Wiesbaden sei der Praxisbezug größer, hier lerne er richtig Programmieren.

In absoluten Zahlen wie auch prozentual nimmt der Anteil der ausländischen Studenten an der Wiesbadener FH zu, erklärt Christoph Heider, Leiter des akademischen Auslandsamtes. Derzeit kommen 826 Studierende aus dem Ausland, das sind etwa zehn Prozent aller FH-Studenten. Den Löwenanteil tragen die Länder Türkei, Iran, Marokko, Griechenland und Kroatien. Die meisten wollen Diplom-Bauingenieure (151) werden, gefolgt von Informatik (146), Betriebswirtschaft (91) und Elektrotechnik. Die Bewerberzahlen aus dem Ausland sind in den vergangenen Semestern hoch geschnellt. Immer mehr

Türkei an der Spitze

junge Menschen aus Osteuropa und China bewerben sich an der Wiesbadener FH.

Was nicht bedeutet, dass es umgekehrt ähnlich ist, erzählt Professor Dr. Detlef Richter vom Fachbereich Informatik: Viele deutsche Studenten seien oft unbeweglich, wollten nicht im Ausland studieren. „Wir müssen sie oft drängen." So hätten sich gerade einmal zwei Studenten um einen Platz als Gaststudent in Texas beworben. „Auch wir müssen werben", bestätigt Professorin Dr. Rita Rosen vom Fachbereich Sozialwesen. Und dies, obwohl Auslandserfahrung von Arbeitgebern mittlerweile fast schon vorausgesetzt wird. Eine gewisse Bequemlichkeit ist nicht der alleinige Grund, weshalb viele deutsche Studenten nicht ins Ausland gehen, weiß Rita Rosen: Viele seien auf ihren Job angewiesen, könnten diesen nicht aufgeben. Auch viele ausländische Studenten haben mit finanziellen Problemen zu kämpfen, beschreibt Heider die Lage. Im Jahr dürften sie nur 90 Tage arbeiten. Schwierigkeiten treten auch auf, wenn im Heimatland ein Bürgerkrieg ausbricht und die Geldströme versiegen. Einige ausländische Studenten haben Probleme mit der begrenzten Aufenthaltserlaubnis von zehn Jahren.

Hier geboren, dolmetscht nebenbei: Elsa Manna.

Praktisch nicht vorhanden sind rassistische Ressentiments an der Fachhochschule. Bei der Frage, ob sie jemals – nicht nur an der FH, sondern überhaupt – Opfer von Diskriminierung geworden sind, schütteln Christine Mourdoukoutas (Griechenland), Fatma Ucar (Türkei), Samira Baddour (Marokko) und Elsa Manna (Eritrea) fast gleichzeitig den Kopf.

Alle vier haben die deutsche Staatsbürgerschaft und studieren Sozialwesen. Drei von ihnen sind hier geboren; Fatna Ucar ist mittlerweile eingebürgert. Elsa Manna hat es sich zu Nutze gemacht, dass sie mehrsprachig aufgewachsen ist: Sie arbeitet nebenher als deutsch-afrikanische Dolmetscherin bei Behörden.

JuLe BLICK IN DIE SZENE

Einen schlechten Geschmack zu haben, ist längst salonfähig geworden. Überall, ob aus dem Fernseher oder über die Ätherwellen. Ja, traut euch ihr Anhänger des **„Bad Taste"**. Konsequenterweise schmückt sich am Samstag im **Schlachthof** die **FH-Fete** für Sozialwesen mit diesem Namen. Um 21 Uhr geht's los. Für fünf Mark seid ihr dabei.

Was vor zwei Wochen das Monkey Jump in Wiesbaden war, ist für Mainz das Honky Tonk-Festival. Unzählige Bands auf Bühnen in der ganzen Stadt werden am Samstag die Nacht zum Tag machen. Mit dabei im **KUZ**: die Elektrobeatiker vom **Mofa Team** und die Doors-Tribute-Band **Backdoors**. Während das Team ausgesprochen nicht rocken will und eher die Beats sprechen lässt, sind die Backdoors ihrem Idol Jim Morrison verfallen und feiern im Gedenken an ihn eine große Bluesmesse. Beginn ist um 20 Uhr für einen Eintritt von 17 Mark.

Den Seniorenpass muss man nicht vorzeigen. Zwar steht am Samstag im **Nassauer Hof** in Idstein-Wörsdorf die **Oldienight for Rentners** wieder auf dem Programm, aber das auch die Musik von gestern immer noch so frisch klingt, als sei sie heute auf den Markt gekommen, wissen sowohl alte als auch junge Stammgäste. Und auch allen neuen Gesichtern sei die Veranstaltung empfohlen.

Mit allen Großen des Blues hat **Louisiana Red** die Gitarrenhälse gekreuzt. Sei es John Lee Hooker, B.B. King oder Rory Gallagher -,er kennt

謹賀新年

拝啓

お元気ですか？クリスマスカードありがとうございました。私には毎年の年末は日本が一番懐かしくなる時期です。日本の友達からたくさんのクリスマスカードや年賀状が来ると、向こうの友達の顔やいろんな思いでが思い浮かぶからです。この間あの寿司屋の名詞を見つけて、本当に近い内にまた日本に行きたいと決めました。家内も、子供も同じように思っています。

今年のベルリンの冬は雪が多いです。１５ｃｍ以上がふりました。うちの庭は真っ白くて、ベルリンの空気が本当にきれいになったことを証明しています。Marco と Jana は雪が大好きいで、毎日そとで遊んでいます。先週雪を使って二人とも入れる、すてきな雪の家を作りました。ベルリンはやっぱり建設ブームです。

私は毎朝家を出ると、外は寒くて、暗くて仕事をしたい雰囲気です。私は相変わらず外務省の日本担当です。この間何週間も日本の上に朝鮮半島やモンゴルも担当して、そのとき Fischer 大臣が日本と韓国を訪問して、私は本当に疲れたのです。来年は今年より楽になれば、と希望します。12 月 1 日 “Working Holiday” という、新しい査証が実現できました。三十歳未満の日本人は今一年間ドイツへきてその滞在費をアルバイトで得ることができるようになりました。その上に日本人は 2001 年からアメリカ人と同じような特権をもらって、査証のてつつきを全部ドイツのなかでできることになりました。私の意見では、ドイツと日本はやっと互いに扉を開くべきだと考えるので、その二つの新しいシステムに全力を入れました。思ったより成功して、これからもその方向に頑張りたいとおもっています。

高松日独協会はどうなりましたか？総領事館との関係はどうですか？
中村さんは来年ドイツにくるチャンスがありますか。ベルリンにもまた寄る可能性があればうれしく思います。必ずまたうちの家に泊まってください。
旦那さんや秋山さん、日独協会の皆さんにくれぐれも宜しくをつたえてください。
お元気に、よいお年を

敬具

中村敏子様
高松、日本
Klaus Vietze、Syringenplatz 12、10407 Berlin、Germany

〒531-6035 大阪市北区大淀中 1・1・88・3501
梅田スカイビル・タワー・イーースト 35 階
大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館
Tel: 06－6440－5070　Fax: 06－6440－5080

日独協会の皆様へ

拝啓
新春の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

この度、日本国籍者のドイツへの入国に際してのビザの規定が変更になりました。その件を告知したプレスリリースのコピーをお送り致しますので、よろしくご査収下さい。ご質問、お問い合わせは、当ドイツ総領事館領事部ビザ係までお願いいたします。

ビザ係　電話：06－6440－5074　（月－金：09：00－12：00、月－木:14:00－16:00）

敬具

2001 年 01 月 10 日（大阪）
ドイツ総領事館

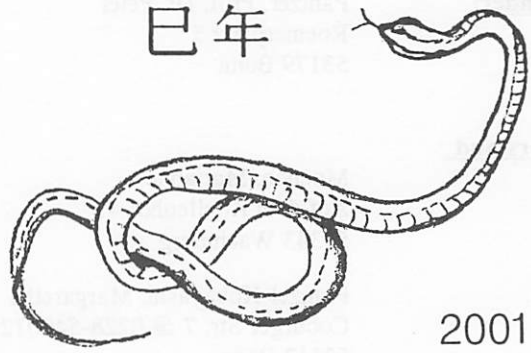
入国手続きの簡略化

シリー連邦内務相によって制定された政令が2000年12月15日に発効し、外国人関連の行政手続きが部分的に簡略化されることとなった。これによりオーストラリア、イスラエル、日本、カナダ、ニュージーランド国籍を有する外国人が比較的長期にドイツに滞在する場合、入国する以前に本国でビザ申請手続きを取ることが必ずしも必要ではなくなった。即ち、ドイツ入国後、現地の外国人局で必要な滞在許可申請をすることができる。これまでそれが可能であったのは、EU市民、スイス人ならびに米国人に限られていた。

入国後に滞在許可申請をすることが許されるという新法令の恩恵に浴するのは、ドイツ人の子供がいる外国人の父親や母親も同様である。

Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn e.V.

独日協会ボン



Die Schlange,
kleine Schwester des Drachens,
Symbol der Weisheit.
Der Weisheit folgt das Glück.
Wir wünschen ein gutes
Jahr der Schlange!

Nr. 1
Januar 2001

Liebe Mitglieder und Freunde,

Sie werden sich vielleicht schon gewundert haben, dass Sie bisher von der DJG weder Neujahrsgrüße noch einen neuen Veranstaltungsplan zugestellt bekamen. Entschuldigen Sie bitte die Verspätung. EDV-Kobolde tummelten sich in den letzten Wochen in der Geschäftsstelle und fühlten sich anscheinend dort sehr wohl. So können wir nur hoffen, dass diese nun auf Dauer verschwunden, Sie aber alle gut in das neue Jahrtausend gekommen sind und vor Unbilden verschont blieben. Möge das begonnene Jahr Ihnen und uns Gesundheit und Zufriedenheit bescheren und in allen verantwortlichen Köpfen dieser Welt „die Weisheit der Schlange" wachsen lassen, um vom Menschen produzierte Katastrophen und Kriege zu verhindern. Der Blick in die Zukunft bereitet Unbehagen in Anbetracht der Geschehnisse, über welche die Medien allein schon in den wenigen Tagen des neuen Jahres berichten. Für unsere Gesellschaft erhoffen wir ein Jahr ohne Sorgen oder Schwierigkeiten. Wir werden uns bemühen, Sie mit interessanten Themen über Japans Politik, Wirtschaft und Kultur zu konfrontieren und das gesellige Zusammensein nicht zu kurz kommen zu lassen.

Es wäre schön gewesen, wenn wir das Jahr der Schlange auch in unserer Gesellschaft mit einem Neujahrsfest oder –empfang eröffnet hätten. Die Zeitspanne zwischen den Neuwahlen des Vorstands und dem Jahresbeginn war aber zu kurz für entsprechende Vorbereitungen. Wir bitten Sie dafür um Verständnis haben. Ein anderes Ereignis steht uns jedoch ins Haus. Die DJG-Bonn kann am 21. Mai dieses Jahres auf **25 aktive Jahre** zurückblicken. Dieses Ereignis wollen wir natürlich begehen. Zwar wird es keinen Festakt mit Empfang und Festschrift wie vor fünf Jahren geben, das sollte man bei 10-Jahresabständen belassen. Doch wir hoffen, dass wir mit vielen Mitgliedern am Abend des 21. oder 22. Mai dieses Ereignis feiern können. Bitte reservieren Sie sich schon jetzt dieses Datum.

Im Namen des Gesamtvorstandes wünschen wir Ihnen von Herzen Glück, Erfolg und sehr viel Gutes!

M. Mönch
(M. Mönch / 1. Vorsitzende)

M. Franzel-Kobayashi
(M. Franzel-Kobayashi / 2. Vorsitzende)

Geschäftsstelle: c/o Marianne Mönch, Auf dem Köllenhof 47, 53343 Wachtberg,
Tel./Fax: 0228-348365, E-mail: djg-bonn@t-online.de
Bankverbindung: Sparkasse Bonn, Kt.Nr. 20 013 850 BLZ 38050000

Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn e.V.
独日協会ボン

Neuer Vorstand in der DJG Bonn e.V.
ab 23. Oktober 2000

Ehrenvorsitzender:	Pantzer, Prof. Dr. Peter Roemerplatz 5 53179 Bonn	☎ 0228-365240 (priv.) ☎ 0228-737599 🖷 0228-737020 ✉ p.p@uni-bonn.de
Vertretungsvorstand		
1. Vorsitzende:	Moench, Marianne Auf dem Koellenhof 47 53343 Wachtberg	☎/🖷 0228-348365 ☎ 0228-345816 (priv.) ✉ djg-bonn@t-online.de
2. Vorsitzende:	Franzel-Kobayashi, Margaretha Coburger Str. 7 🖷 0228-5400122 53113 Bonn	☎ 0228-239906 ✉ Franzel@eps-bonn.de
Vorstandsmitglieder:	Freynhagen, Britta Friedrich-Friesen-Str. 10 53225 Bonn	☎/🖷 0228-9738714 (priv.) ☎ 0228-975960 ✉ bfreynhagen@gmx.de
	Marx, Dr. Andreas Maximilianstr. 34 53111 Bonn	☎/🖷 0228-9813769 (priv.) ☎ 0228-735588 ✉ a.marx@uni-bonn.de
	Oberlaender, Dr. Gisela Kirschallee 48 53115 Bonn	☎/🖷 0228-218483 ✉ Oberlanderg@aol.com
	Schreck, Helmut Jakob-Hengstler-Str. 14 53119 Bonn	☎ 0228-988450 (priv.) ☎ 0228-9887618 🖷 0228-9887611 ✉ H.Schreck@eps-bonn.de
	Schaper, Hans von Buettgener Str. 5B 47877 Willich	☎ 02154-6751 (priv.) ☎ 0211-8995870 🖷 0211-8935870 ✉hans.vonschaper@stadt.duesseldorf.de
	Wallentowitz, Anneli Roemerstr. 12 53111 Bonn	☎ 0228-9695203 (priv.) ☎ 0228-739693 ✉ uzs6bd@uni-bonn.de
Kassenpruefer:	Bergmann, Stefan Mohrstr. 8 53121 Bonn	☎ 0228-626266
	Becker-Blonigen, Erika Sertuernerstr. 4 53127 Bonn	☎ 0228-283779 🖷 0228-283779
Ehrenmitglieder:	Dietz, Wolfgang Am Wolfbach 50, 53229 Bonn	☎ 0228-481452 🖷 0228-432941
	Zachert, Susanna Friedrichsallee 8a, 53173 Bonn	☎ 0228-368220

Geschäftsstelle: c/o Marianne Mönch, Auf dem Köllenhof 47, 53343 Wachtberg,
Tel./Fax: 0228-348365, E-mail: djg-bonn@t-online.de

００年度香川日独協会事業活動報告

・００年　４月２５日（火）１３：３０～１６：００。

香川県と（財）香川県国際交流協会共催の「香川国際交流ネットワーク会議」が［アイパル香川］で開催され、事務局が出席。議題は「平成１２年度の国際交流新規施策について」、「平成１２年度の事業実施計画について」他でした。

・００年　５月　７日（日）１３：３２～１５：５７。

００年度第１回「理事会」を［アイパル香川］の会議室で開催。協議事項は、９９年度事業報告（案）、９９年度決算書（案）、００年度事業計画（案）、００年度予算書（案）、「香川日独協会会則」の改正、「事業企画（仮称）委員会」の設置などについて及び報告事項。出席理事は、８名。

・「会則」の変更内容と００年度予算書（案）の支出の一部について、再検討するようとの意見が、多数を占め、事務局で「総会」までに調整をすることとなった。

・００年　５月１０日（水）１３：３０～１５：００。

（財）香川県国際交流協会、（財）高松市国際交流協会共催の講演会「広がりゆく一校一国運動」が、［アイパル香川］の３Ｆ大会議室で開催され、事務局が出席。講師は、小出博治氏：（社）長野国際親善クラブ会長でした。

・００年　５月２０日（土）１５：３０～１７：００。

（財）香川県国際交流協会主催の「かがわ国際交流フェア２０００」の説明会が［アイパル香川］の３Ｆ会議室で開催され、事務局が出席。

・００年　６月１８日（日）１３：００～１３：３０。

第２回「理事会」を［ ホワイト・ホテル］で開催。協議事項は、第１回と同じ（会則の改正は、削除）。出席理事は、９名。

・００年　６月１８日（日）１４：００～１５：００。

００年度第１回「総会」を［ホワイト・ホテル］で開催。審議事項は、上記「理事会」に同じ。出席会員は、２４名。

・００年　６月１８日（日）１５：１５～１８：００。

００年度第１回「懇親会」を［ホワイト・ホテル］で開催。２２名出席（一般：２０名、学生：２名）。

・００年　７月　２日（日）１３：３０～１５：００。

００年度第３回「理事会」を［アイパル香川］会議室で開催。８名出席。協議事項は、「事業企画委員会」の委員の推薦について。次の方々を推薦し、ご当人の了解が得られた。委員の方々は次のとおりです。岡谷　博、倉光貴子、高木文夫、中條比紗美、新田義文、森　勉会員。

鳴門のドイツ館前にて（2000 年 10 月 1 日）

クルト・テラー夫妻を囲んで　（2000 年 11 月 9 日）

’００年　7月２１日（金）～２９日（土）の９日間

「ドイツにおける日本年」の行事参加等のため、「香川日独協会ドイツ訪問団」を総勢３６名で結成し、ボン独日協会との交流、ボン市の「Sommer in Bonn」で「さぬき踊り」（民謡舞踊）披露。交流、親睦を深めた。

’００年　8月　6日（日）１３：３０～

「事業企画委員会」（第１回）が、「アイパル香川」の会議室で開催されました。

’００年　8月２２日（火）～9月２３日（土）

大学生のための「ドイツにおける企業研修・ホームステイ」を支援。明神美枝　学生会員　選ばれて参加。

’００年　8月２８日（月）１９：００～

「事業企画委員会」を高松市内で開催。

’００年　9月3日（日）　１４：００～

高松市内で開催された「チター演奏会」を今年度も支援しました。

’００年　9月１２日（火）

EU講演会「EUと日本」　会長、会員５名参加

’００年　9月２６日（火）

「事業企画委員会」を高松市内で開催。

’００年　10月1日（日）

バス旅行

脇町（うだつの町並）－　鳴門公園（渦の道）－　ドイツ館

参加者20名。

’００年　10月3日（火）

ドイツ統一10周年を祝うレセプション

（ドイツ総領事主催）神戸・相楽園

大坂理事出席。

’００年　10月3日（火）

観音寺・一の谷小学校と、ドイツ・オークスト小学校との交流　15周年レセプション、　観音寺

秋山理事、高野、三谷、西山会員出席。

’００年　10月17日（火）19：00～

「事業企画委員会」を高松市内で開催。

’００年　10月22日（日）

00年度第４回「理事会」を高松市内で開催。

ライナー・シュラゲター公使参事官夫妻を迎えて

（2000 年 11 月 21 日）

屋島四国村（加藤達夫館長ご夫妻による案内）

歓迎夕食会

’００年　10月24日（火）

ハイデルベルグ・フィルハーモニー管弦楽団 公演を後援

県民ホール

’００年　11月８日（水）～11日（土）

オンデンブルグ独日協会会長　クルト・テラー氏と夫人が来県。

歓迎会を催す。（テルサ・大坂　８日）

’００年　11月９日（木）　19：00～

「事業企画委員会」を高松市内で開催。

（クルト・テラー会長と夫人同席）

’００年　11月12日（日）

B.S主催の「ドイツ国際平和村支援計画」を後援。

’００年　11月21日（火）

香川県外交官招聘事業で、ライナー・シュラゲター公使参事官と夫人が来県。（20日～22日）

屋島・四国村を案内（会長・理事　会員　６名同行）

香川大学で学長表敬、講演会

歓迎夕食会　18名出席　高松市内

’００年　12月11日（月）　19：00～

「事業企画委員会」を高松市内で開催。

’００年　12月14日（木）

高松高校・ハートフルコンサート（第九・歓喜の歌）演奏発表会に、永井元会員がテノールで一般参加出演。会長他多数会員出席。

’００年　12月16日（土）18：00～

クリスマス会・Weihnachtsparty

高松三越店　６Ｆ　ランドマーク

森本幹子（ソプラノ）　吉田直子（ピアノ伴奏）両先生のAbe Mariaではじまり、終始なごやかに歓談し、歌い、各自持参したプレゼントを輪になってまわし、歓声をあげながら楽しみました。

’０１年　１月28日（日）　13：30～

00年度第５回「理事会」を「アイパル香川会議室」で開催。

協議事項は、（１）役員人事について（任期満了に伴う）（２）香川日独協会創立10周年について　（３）「日独学生交流」プログラムによる訪日学生代表団歓迎行事について　（４）その他　６名出席

クリスマス会

(2000年12月16日)

’０１年 1月30日（火）

ドイツ大使館政治参事官ヨーゼフ・ヴァイス氏が地方視察のため、来県。

屋島寺、四国村を案内。会員5名同行

’０１ 年3月4日（日）

第6回「理事会」をアイパル香川で開催。

役員の役割分担について協議　　7名出席

’０１年 3月14日（水）15日（木）

2000年度全国日独協会連合会年次総会に会長出席（東京）

’０１年 3月18日（日）

「日独学生交流プログラム」による訪日学生団18名と学生会員10名が交流。

独の学生交流18人

伝統文化学びたい

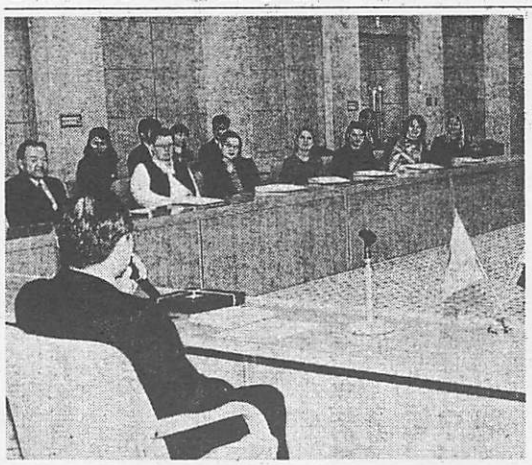
知事表敬、研修の抱負語る

ドイツの大学生代表団十八人が十五日、県庁に真鍋知事を表敬訪問、「ホームステイを通じて、香川の伝統文化を学びたい」などと今回の研修への意気込みを語った。

一行は、文部科学省とドイツの連邦家庭・高齢者・女性・青少年省が促進する日独相互交流事業の一環として、十一日に来日。東京や広島での研修活動を経て、十五日香川入りし、二十日まで滞在する。

知事は「ドイツの将来を担う青年と県内の若者たちが友好を深めることは大変意義深い。滞在中、香川の伝統文化に十分に触れ、今回の研修が実りの多いものになるよう期待している」とあいさつ。スガノ・ヨシミ・テレーザさんは「美しい景色を堪能するとともに、多くの人々と出会えることを楽しみにしている」と抱負を述べた。

一行は滞在中、うどん作り体験や香川大生との交流会に参加するほか、栗林公園を視察する。



香川での6日間の滞在に向け抱負を語るドイツの大学生代表団＝県庁

「四国新聞」 2001年3月16日

ヨーゼフ・ヴァイス参事官を迎えて

（2001 年 1 月 30 日）

屋島山上

県庁 21F ホール

【表紙】

ベルリン州立歌劇場は、近年、もっとも注目を浴びているオペラハウスの一つである。2002年春のフェストターゲで、ワーグナーの主要10作品が一挙に上演されるからである。同一の指揮者と演出家（バレンボイムとクプファー）による連続上演という、ほとんど前例のない、まさに空前絶後の企画である。

また、2002年1月16日から2月13日までのほぼ一ヶ月間の日本公演でも、ワーグナー『ニーベルングの指環』全4作の3回の通し公演が予定されている。

	Zyklus I	*Zyklus II*
Der fliegende Holländer	24.3.	13.4.
Tannhäuser	25.3.	14.4.
Lohengrin	26.3.	15.4.
Das Rheingold	28.3.	17.4.
Die Walküre	29.3.	18.4.
Siegfried	31.3.	20.4.
Götterdämmerung	2.4.	22.4.
Tristan und Isolde	4.4.	26.4.
Die Meistersinger von Nürnberg	5.4.	27.4.
Parsifal	6.4.	28.4.

香川日独協会会報 第9号
2001年5月発行

発　行：香川日独協会事務局
Japanisch-Deutsch Gesellschaft KAGAWA
〒760-0017 香川県高松市番町 4-4-20
中村敏子気付 087-861-6820
発行責任者：中村 敏子（会長）
編　集：最上 英明
印　刷：（株）万成社

pG
agawa